目　　次

１．大阪ガラス發祥之地
２．造幣局
３．旧川口居留地
４．大阪舎密局址
５．大阪英語学校跡
６．石山本願寺（大坂本願寺）推定地
７．大坂城/大阪城
８．大阪銀座跡
９．少彦名神社・くすりの道修町資料館
10. 大阪薬科大学発祥の地
11. 懐徳堂旧阯碑
12. 銅座の跡
13. 適塾
14. 除痘館跡
15. 北組惣会所跡・南組惣会所跡
16. 八軒屋船着場の跡
17. 大阪会議開催の地
18. 大阪金相場会所跡
19. 大阪商法会議所跡、五代友厚君像、大阪証券取引所ビル
20. 大阪俵物会所跡
21. 淀屋の屋敷跡
22. 手形交換所発祥の地
23. 松尾芭蕉終焉の地
24. 住友銅吹所跡
25. 安井道頓・道卜紀功碑
26. ボードインゆかりの地

１．大阪ガラス發祥之地

大阪ガラス發祥之地[1)]
（大阪天満宮境内）
［北区天神橋二丁目１番８号］

大阪市北区にある大阪天満宮の正門の西側境内に「大阪ガラス発祥之地」の碑がある。

その碑によると、江戸中期の宝暦年間(1751～1764)に大阪天満宮の前でガラスの製造を始めた長崎の商人 ･播磨屋清兵衛が、「大阪ガラス商工業ノ始祖」だとされている。

播磨屋清兵衛は、オランダ人が長崎に伝えたガラス製法を学び、大阪にもち込んだ[2)]。

1819(文政２)年には渡辺朝吉という人物が川崎村(現在の北区西天満六丁目付近)にガラス工場を作ったといわれる[2)]。同じ頃、ガラスの製造法が江戸に伝わったといわれていることから、ガラス製造の開始は、江戸よりも大阪の方が早かったことになる。

明治時代に移るとイギリスから新しい製造技術が流入した。

1875(明治８)年に伊藤契信が川崎村天満山(現在の北区与力町)にガラス工場を作り、1882(明治 15)年には大阪最初の洋式ガラス工場を新設して、同地に日本硝子会社を設立した[3)]。1880（明治 13 年）には徳永ガラスが創業されて清酒やラムネのびんが作られ、島田ガラス、山為ガラスなど板ガラス・装飾ガラス・食器を次々に開発し、国内に広まっていった[2)]。

1888(明治 21)年には、日本硝子会社を退職した島田孫市が同じ天満地区に島田硝子製造所を興す。この島田孫市は、大阪における洋式切子の端緒を開いた職人のひとりであり、大阪の近代ガラスを象徴する人物だったといわれている[2)]。

これ以後、現在の与力町・同心界隈を中心にガラス工場が増えていき、アジア市場への輸出などもあって、大阪のガラス産業は急速に膨張していく。

大阪市北区は大阪のガラス業界の先駆となった。

「昭和初期迄の大阪の硝子業者は小規模ながら、江戸以来の伝統を引く各種珠類、灯火器、瓶類などの薄物製品を中心に、食器を含めて多種多様であり、その業者の数は東京を凌いでいた」といわれ、往時の盛況ぶりがうかがえる[4～6)]。

なお、ガラスのビー玉がはじめて国産化されたのも大阪市北区である。

こうした大阪のガラス産業の移り変わりについては、郷土史関連の書籍に触れられている[8～9)]。

国内の競争や安い輸入品に押されて、隆盛を誇った大阪のガラス産業も衰退し、今では、「大阪ガラス発祥之地」天満界隈からガラス工場はほとんど姿を消してしまった。しかし、薩摩切子の技術を受け継ぐ「天満切子」が製造されるなど、ガラス産業の伝統は今もこの地に生き続けている[10)]。

参考または引用文献

１）おおさか資料室　大阪市立図書館
　質問　「大阪ガラス発祥之地」の碑について
　　ＵＲＬ：https://www.oml.city.osaka.lg.jp/index.php?key=muuk5iizs-8993

２）三善貞司編、“大阪ガラス発祥之地碑 名筆燈籠 なにわの誇り大阪天満宮”、大阪キタの史跡と伝承、p.86-87、大阪市淀川区役所（2005）

３）江戸切子：その流れを支えた人と技
　　ＵＲＬ：http://edokiri.com/

４）舞台の遺伝子　電球から魔法－ガラスの街・天満－、産経新聞(大阪版・夕刊)、２面、2013 年 11 月 9 日

５）山口勝旦、江戸切子－その流れを支えた人と技－、p.241-261、里文出版（2009）

６）戦前に大阪・島田硝子がウランガラスを製造
　　ＵＲＬ：http://uranglass.gooside.com/goldenlight/yomoyama.htm

７）新修大阪市史編纂委員会編集、新修大阪市史、第 6 巻、p.258-259、大阪市（1994）

８）『北区誌』、p.595、大阪市北区役所（1955）

９）大阪都市協会編集、『北区史』、p.474、北区制 100 周年記念事業実行委員会（1980）

10）まちに活きる技と心－北区の伝統文化と職人さん－、大阪市北区役所区民企画担当（2007）
11）戸澤道夫、日本のガラス－その見方、楽しみ方－、里文出版（2001）
12）淡交社編集局編、諸木靖宏写真、なにわの職人－“ええなぁ”と見惚れる技 60 人－、淡交社（1997）
13）“News 撮 天満切子　歴史映す天満のきらめき”、産経新聞(大阪版・夕刊)、　7 面、2018 年２月 15 日
14）三善貞司編、大阪史蹟辞典、p.441、清文堂出版（1986）
15）宮崎　啓一, 多胡　彰郎, “わが国の医療機器および理科学機器取扱いの変遷－医療用ガラスから理科学ガラスへ－(ポスター発表３)”, 薬史学雑誌, 46(2), 110-110(2011)
16）木下義夫、“スーパーカミオカンデのガラス製造技術”、機械の研究、57(12)、1249(2005)
17）55 年史編集委員会、日本科学機器団体連合会 55 年史、日本科学機器団体連合会(2001)
18）服部　昭、印籠と薬―江戸時代の薬と包装―、風詠社(2010)
19）藏満邦弘ほか編集、“木下義夫 氏に訊く”「理化学ガラス業界の変遷と私の人生」(下)、科学機器、No.735、東京科学機器協会(2009)
20）木下義夫、“わが国理化学ガラス業界の回顧 その１”、科学機器、No.706、東京科学機器協会(2007)
21）医学ジャーナル印刷部、大阪科学機器業界史、大阪科学機器協会(1972)
22）東京医科器械同業組合、M.I.C.東京医科器械綜合標準カタログ(改訂版)、東京医科器械同業組合（1963）
23）佐々木公友、科学機器沿革小史、東京科学機器協会(1985)
24）由水常雄、正倉院ガラスは何を語るのか－白琉璃碗に古代世界が見える－、中公新書(2009)

２．造幣局

造幣局[1)]
［北区天満一丁目１番 79 号、西側入口］

造幣局旧正門

造幣局旧正門碑

造幣局は、近代国家としての貨幣制度の確立を図るため、明治新政府によって大阪に創設され（大阪市北区）、1871（明治４）年４月４日（旧暦２月 15 日）に創業式を挙行し、貨幣の製造を開始した[2)]。

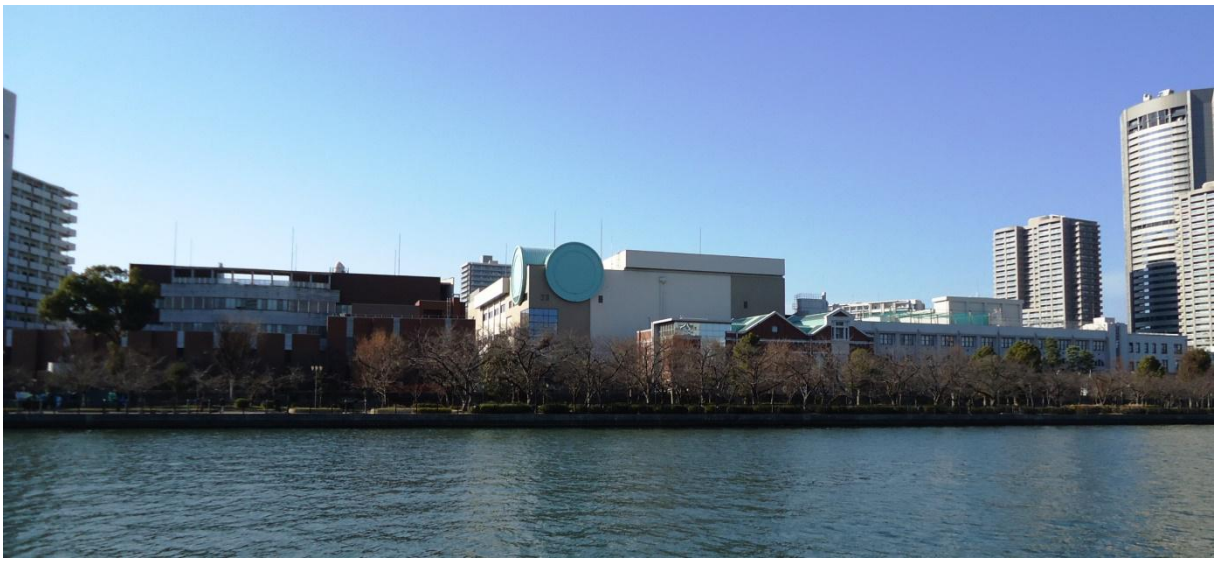
造幣局が大阪に建設された理由については、水運が発達し、広大な土地があったこと、さらに明治維新の事業に貢献した大阪財界への配慮や「大阪遷都論」の影響も指摘されるが、「正式な記録がないので、詳細は不明」（造幣局）というのがおもしろい[3)]。

当時としては画期的な洋式設備と新しい知識の導入によって、本邦近代工業の先駆的役割を果たすとともに、その後幾多の変遷と試練を負いながら、国家の経済の根幹をなす貨幣の円滑な供給という重責を担った[1)]。

当時我が国では、機械力を利用するなどの産業が発達していなかったため、大型の機械設備を輸入しながらも、貨幣製造に必要な各種の機材の多くを自給自足するよりほかなかった[1、2)]。

硫酸、ソーダ、石炭ガス、コークスなど製造、や電信・電話などの設備並びに天秤、時計などの諸機械の製作をすべて局内で行っていた[1、2～5)]。

事務面でも自製インクを使用、またはじめての複式簿記の採用、さらに身なりや装いでは断髪、廃刀、洋服の着用などを率先して実行した[1、2)]。



大川対岸より造幣局をのぞむ

このように、造幣局は、明治初年における欧米文化移植の先駆者として、我が国の近代工業及び文化の興隆に重要な役割を果たしたことから、その後の大阪市が国内において、商工業の中心としての繁栄を見るようになったのは、造幣局に負うところが少なくないといわれる[1)]。

なお、造幣寮（現造幣局）の設立に先立ち、薩摩出身の五代友厚が官を辞して、野に下ったの、1869（明治２）年７月４日のことであった。五代は大阪に開設されよ

うとする造幣寮問題にとくに力を籍し、下野すると月余の後には、西成郡今宮村で金銀分析所を始めた[4)]。五代のこの時期の活動は、その後彼が経済界に雄飛するする基盤をなしたという意味で見逃すことのできないものであった。

現在、造幣局は貨幣の製造のほか、時代の要請にこたえて勲章・褒章および金属工芸品などの製造、地金・鉱物の分析および試験、貴金属地金の精製、貴金属製品の品位証明（ホールマーク）などの事業も行っている[1、3)]。

参考または引用文献

１）独立行政法人 造幣局
ＵＲＬ：https://www.mint.go.jp/about

２）造幣局 125 年史編集委員会編、造幣 125 年のあゆみ、造幣局泉友会（1996）

３）“維新 50 年 大阪の痕跡を歩く≪29≫ 最先端技術の総合プラント―造幣局―”、産経新聞（大阪版 朝刊）、23 面、2019 年２月 23 日

４）藤野　明、“五代友厚・関一記念特集号　野に下った五代友厚－造幣寮と金銀分析所をめぐって－”、大阪の歴史、18 号、24-46、大阪市史編纂所(1986 年 3 月)

５）井上　薫編、“造幣局と砲兵工廠 一 「御一新」と大阪商人 よみがえる大阪 近代・現代”、大阪の歴史、p.311-314、創元社（1986）

６）独立行政法人 造幣局、造幣局のご案内 パンフレット

７）独立行政法人 造幣局、造幣博物館パンフレット

８）創業当時の貨幣制度、造幣博物館資料

３．旧川口居留地

日本聖公会 川口基督協会[1)]
［西区川口一丁目３番８号］

川口居留地跡
（大阪市立本田小学校の角）
［西区川口一丁目６番］

旧川口居留地が設置された場所は、大坂市中の西端にあたる。安治川と木津川に囲まれ、総面積は約 25,600 ㎡(7746.5 坪)、一区画当りの面積は約 300 坪であった。その規模は他の居留地(横浜・長崎・神戸・東京築地)と比べて最も狭い[2～5)]。

そもそも、当時“川口”とは大阪市内、安治川と木津川の分岐点の地域のことをいった（西区）[6)]。

居留地の道路は舗装され、洋館が建築され、大阪の文明開化の先駆けとなった[6)]。

1858 年、日米修好通商条約の締結の後、英国、米国、プロイセン、フランスおよびオランダの５か国と条約を結び、開市場であった大阪は 1868（慶応４）年７月 29 日に開港となり（川口波止場)、川口居留地が外国人に競売された[3)]。

江戸時代、「天下の台所」として経済の中心であった大阪に期待した外国商人たちが殺到した[3、7、8)]。

港の不整備、大阪－神戸間の鉄道開通、大阪経済の衰退、不正取引に対する厳しい取締りなどにより、外国商人たちの大半は神戸に移った[3～5)]。

代わって、居留地に入ったのは欧米系の宣教師らで、教会や学校、病院が建設された。照暗女学校（現平安女学院）、永生女学校（現プール学院）、三一小学校（現桃山学院）など関西を代表するミッションスクールが相次いで創立され、キリスト教伝道と女子教育の拠点となっていく[9～11]。

1884 年の川口居留地の居住者や施設を見ると、26 区画の内、キリスト教関係の住居、施設が 20 区画を占め、キリスト教伝道の拠点としての性格を明確にした。宣教師たちの強い要望もあり、1886 年にはさらに 10 区画の居留地が拡張されることになった[4]。

1899 年、条約改正により外国人居留地は廃止されることになった。川口はその後、川口華商と呼ばれた中国人貿易商が活動する場と変わり、中国人街へと移っていく[3～5，8]。

住民は変われど、川口は洋の東西の文化が融合した「ハイカラ」で「エキゾチック」な時代の最先端のまちであった[5]。

日本聖公会大阪主教座聖堂川口基督教会は、現在当該地域における往時を偲ぶ赤煉瓦建築のランドマーク的存在である[12]。1995 年の阪神淡路大震災により塔などが崩壊し、その後に多くの寄付を受けて復旧された。

参考または引用文献

１）川口基督協会、教会へのごあんない パンプレット（2015）

２）“錦絵 大阪百景　入り交じる西洋 開化絵の華 川口西洋館”、産経新聞（大阪版 朝刊）、22 面、2005 年９月 19 日

３）新修大阪市史編纂委員会編、“第二節 開市・開港と居留地　第一章 明治維新と大阪”、新修大阪市史 第５巻、p.42-85、大阪市（1991）

４）大阪市史編纂所編、“大阪の居留地と文明開化 ２．文明開化の諸相 第７章　大阪の近代”、大阪市の歴史、p.234-237、大阪市（1999）

５）“維新 50 年 大阪の痕跡を歩く≪26≫ 文明開化発祥のまち―川口居留地―”、産経新聞（大阪版 朝刊）、15 面、2018 年 12 月 29 日

６）小山仁示、芝村篤樹、“五代友厚 １「天下の台所」の変貌 一近代大阪への胎動”、大阪府の百年 県民百年史 27、p.18-22、山川出版社（1991）

７）宮崎　啓一, 宮本　義夫, 三島　佑一, “大阪道修町における試薬業の変遷－試薬業の黎明について－(一般講演５)”, 44(2), 109-110(2009)

８）新修大阪市史編纂委員会編、“４ 大坂開市から開港へ 第六節 諸制度の変革と経済変動　第五章 近代への転換”、新修大阪市史 第４巻、p.1054-1058、大阪市（1990）

９）川口基督協会、大阪川口居留地・雑居跡―聖公会関係学校・施設創設と日本聖公会組織成立の地―　パンフレット
10）桃山学院大学　大学の歩みダイジェスト
ＵＲＬ：http://www.andrew.ac.jp/info/history.html
11）新修大阪市史編纂委員会編、“３キリスト教の伝道　第三節 宗教界の動向　第五章 教育の普及と文化”、新修大阪市史 第５巻、p.794-814、大阪市（1991）
12）“川口基督教会の煉瓦 鮮やかなコントラスト　モダン建築への招待 細部　の詩学（ディテール）”、産経新聞（大阪版　夕刊）、６面、2006 年 11 月 29 日

４．大阪舎密局址

舎密局址

史跡　舎密局址

K.W.ハラタマ像

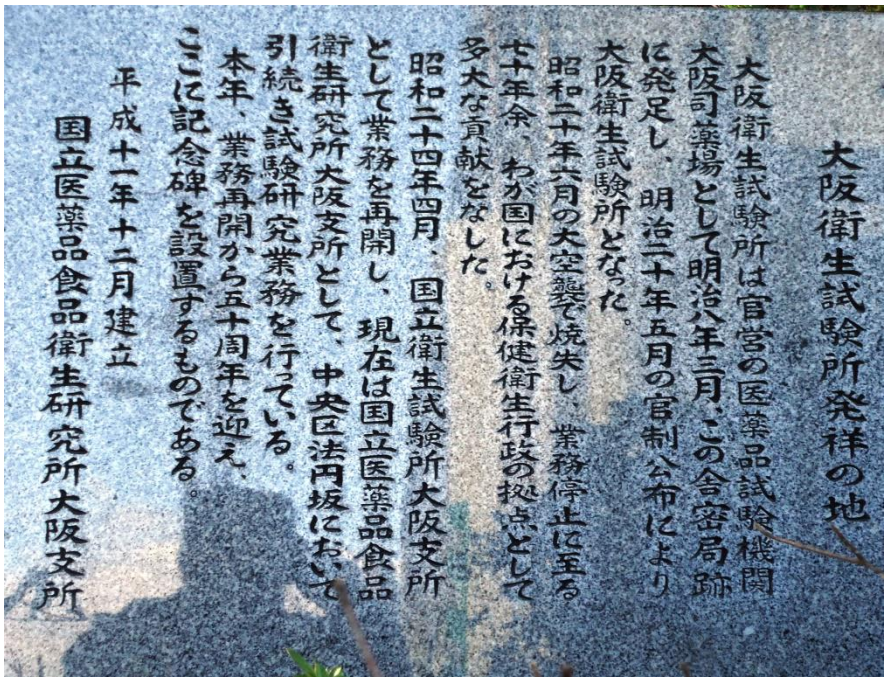
［大阪市中央区大手前三丁目１番］

大阪舎密局（舎密局と略称する）は 1869(明治 2)年 5 月に化学技術の研究・教育および勧業を目的とし、官営・公営の日本最初の理化学専門の高等教育機関として開校した。その教育については理化学を中心とする西欧式近代教育を本格的に導入し、実地教育を主とする大学形態のものであった。日本の近代化学発祥の地といえる舎密局は大阪城の西側、現在の大阪府庁の南側の位置に開設され、後に日本の化学を世界レベルに押し上げる礎となった。

「舎密」はフランス語由来のオランダ語の chemie（化学）に起因し、宇田川榕菴の著書『舎密開宗』が先例となっている。

1868(明治元)年、明治政府は当時遷都計画のあった大阪に新しい教育機関を開設し、その教頭として長崎医学校前身の精得館の理化学専門外人講師であったオランダ人科学者ハラタマ(Koenraad Wolter Gratama、1831～1888)をむかえ、幕府が果たせなかった本格的な理化学教育を実現しようとしたのが舎密局であった。舎密局においてハラタマは物理学および化学の講義を担当した。舎密局での講義録は、『舎密局開講之説』、『理化新説』、『物理日記』および『化学日記』などとして出版された。さらには化学の講義実験および学生実験もなされた。

舎密局の聴講生であった高峰譲吉は後年タカジアスターゼを発見し、世界で初めてアドレナリンの単離に成功する。舎密局の助手を勤めた村橋次郎は、後に味の素®を発見する池田菊苗を指導した。



大阪衛生試験所発祥の地

第三高等学校同窓會建

［大阪市中央区大手前三丁目１番］

1870（明治３）年 10 月、舎密局でハラタマに学び、助手として出仕した明石博高（ひろあきら）により設立され、同年 12 月に開所したのが京都舎密局である。

その後、舎密局は大阪理学校（1870(明治３)年５月）へ名称変更がなされ、1870(明治３)年 10 月、大阪洋学校（1869(明治３)年９月）とともに大学管轄となり、大阪開成所（1869(明治３)年 10 月）へ改組され、同分局理学所となった。その後、1872(明治５)年８月学制頒布に伴い、大阪における舎密局の以来の理化学専門教育は廃止となり、人も物も四散する運命にあった。残された施設は高等普通教育の第四大学区第一番中学となり、幾多の校名の変遷を経て、大阪から京都の地に移り、旧制第三高等中学校（1889(明治 22)年９月）となり、1894(明治 27)年６月、旧制第三高等学校（京都大学の前身）の源流となった。

舎密局は短命には終わったものの、それは日本の化学の黎明を告げる歴史のひとこまとして永く記憶されることになる。

参考または引用文献

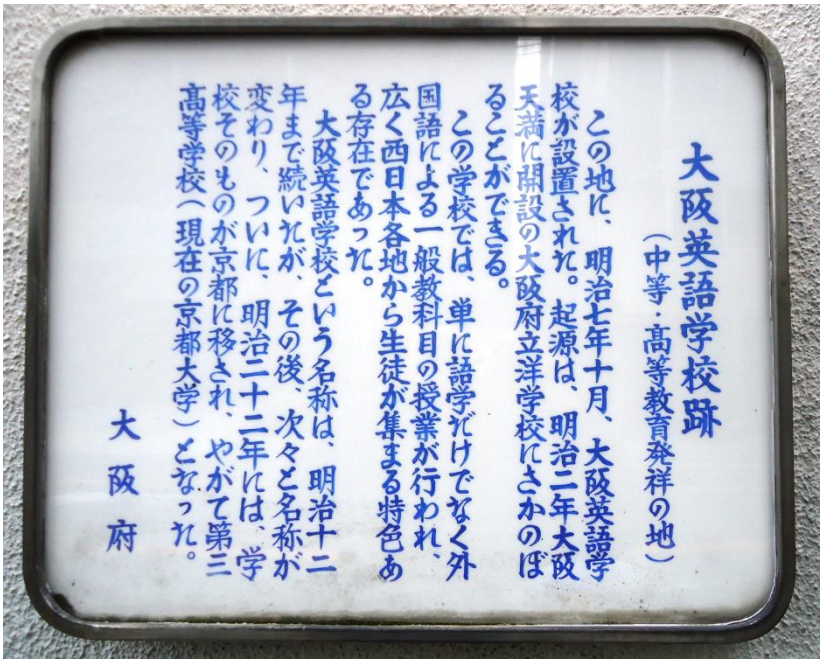
１）中央区史跡文化事典・改訂版、舎密局址、p.68-68、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

２）宮崎啓一、“41. 日本化学の黎明を告げた大阪舎密局”、p. 192-193、日本薬史学会編、薬学史辞典、薬事日報社(2016 年３月 30 日)

３）京都大学百年史編集委員会、“【総説編】[第１編：総説]”、『京都大学百年史 総

説編』、京都大学後援会（1998）
４）藤田英夫、『大阪舎密局の史的展開―京都大学の源流―』、思文閣出版(1995)
５）公益社団法人　有機合成化学協会　関西支部　、“舎密局（せいみきょく）とは”、ＵＲＬ：http://www.soc-kansai.org/seimikyoku/
６）芝　哲夫、“特集　科学風土記―沖縄から北海道まで―大阪舎密局とハラタマ”、化学と教育、44(1)、16-17(1996)
７）芝　哲夫、“ニュース　第 18 回　化学会館化学史資料展示（3 月 1 日～８月中旬）舎密局とハラタマ”、化学史研究、27(2000)、77-79（2000）
８）舎密局、Wikipedia、ＵＲＬ：http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%88%8E%E5%AF%86%E5%B1%80
９）石川遼子、“大阪中学校・大学分校・第三高等学校―明治前半期大阪における官立中学校のゆくえ―”、大阪の歴史、60 号、93-117、大阪市史編纂所(2002)
10）新修大阪市史編纂委員会編、“２専門教育の始まり　第一節　「学制」前の教育　第五章 教育の普及と文化”、新修大阪市史 第５巻、p.676-686、大阪市（1991）

５．大阪英語学校跡



大阪英語学校跡[1)]
[中央区谷町二丁目３番]

大阪英語学校[2)]は、1873（明治６）年２月「開明学校」として設立され、1874（明治７）年 12 月、大阪英語学校と改称された。中等教育機関であり、第三高等学校の前身である[3)]。

大阪英語学校の源流は、1869（明治２）年９月に明治新政府が設置した大阪府立の「洋学校」（大阪洋学校）に始まった[4)]。1870（明治３）年４月、大阪洋学校は理学校（大阪舎密局の後身）とともに大学南校に移管され、同年 10 月には両校が統合されて「大阪開成所」が設立された[2～5)]。大阪開成所は語学に加えて理化学の教育も行うことになり、東京の大学南校と並ぶ西の洋学教育の拠点となったが、1872（明治５）年８月には学制発布により「第四大学区第一番中学」に改編、舎密局以来の理化学教育は廃止された[3～5)]。

1873 年（明治６年）２月、第四大学区第一番中学は同年４月の学制二編追加に先立って官立外国語学校の一つである「開明学校」に転換され、通訳養成および高等教育機関進学の課程を担うことになった[2)]。翌年４月、開明学校は他の官立外国語学校に合わせて「大阪外国語学校」と改称、英語科教育二十点が置かれていたことから同年 12 月には「大阪英語学校」と再改称した[2)]。

大阪英語学校は東京英語学校および東京外国語学校（旧外語）とともに存続し、1879（明治 12）年４月まで続いた。ここでは単に語学のみならず、文理系の幅広い

分野の一般教養科目の授業が外国語でなされた[1)]。その後の校名の変遷を経て、1886（明治 19）年、第三高等中学校（1894（明治 27）年に第三高等学校と改称）となり、1889（明治 22）年、京都に移転し、現在の京都大学へと発展する[3～5)]。

参考または引用文献

１）中央区史跡文化事典・改訂版、銅座の跡、p.16-16、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

２）大阪英語学校（旧制）- Wikipedia
U R L : https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E9%98%AA%E8%8B%B1%E8%AA%9E%E5%AD%A6%E6%A0%A1_(%E6%97%A7%E5%88%B6)

３）宮崎啓一、“41. 日本化学の黎明を告げた大阪舎密局”p. 192、日本薬史学会編、薬学史辞典、薬事日報社(2016 年３月 30 日)

４）京都大学百年史編集委員会、“【総説編】[第１編：総説]”、『京都大学百年史 総説編』、京都大学後援会（1998）

５）藤田英夫、『大阪舎密局の史的展開―京都大学の源流―』、思文閣出版(1995)

６．石山本願寺（大坂本願寺）推定地

石山本願寺推定地[1)]
［中央区大阪城２番］

石山本願寺の名称については、大坂本願寺の方が正しいといわれ[2～4)]、当時石山本願寺という名称は使用されず大坂本願寺と表記するべきであるといわれる[2)]。

実際に『本願寺日記』にも大坂の記載があるといわれる。戦国の当時は「大坂本願寺」と呼ばれており、後世「石山本願寺」というようになった[5)]。

浄土真宗本願寺八世宗主であった蓮如がその晩年に御坊を建立した[6)、7)]際に建築素材に石が出てきて喜ばれたので、石山となった伝承がある[3)]。

そもそも、大坂は現在の大坂城本丸・二ノ丸が立地するあたりをさしていう地域名称に過ぎなかった[6、8～11)]。そしてこれまで、この小さな土地をさして「大坂」と呼んだのは、蓮如がその晩年 1498（明応７）年 11 月 21 日の御文章（ごぶんしょう）の記載に「大坂」にみつけることができる[6,12)]。

大阪が近世都市として繁栄するスタートは、本願寺蓮如による大坂御坊の創設にあった[13)]。本願寺教団が、親鸞による開教後、巨大な宗教集団に成長したのは、抜群のオルガナイザー蓮如の登場以降のことである[13、14)]。

織田信長が畿内進出をはたすと、本願寺に矢銭（やせん）（軍用金）5,000 貫を賦課し、当時の法主第 11 世顕如（けんにょ）はこれに従った[14)]。しかし、翌年 1570（元亀元）年、信長がさらに本願寺退去とその破却を要求するにいたり、両者の関係は悪化した[13~15)]。以後 11 年間、信長との苛烈な石山合戦に突入した。最終的には和議が結ばれ、顕如が大坂本願寺を退去することで決着をみた[13、15、16)]。その後、寺内から火を発し、その炎は三日三晩炎を上げ続け、寺内町は灰燼に帰した[13)]。

蓮如が御坊を創建した 1496（明応５）年以来、大坂本願寺は 85 年間の歴史に終止符を打った[16、17)]。

本願寺の焼失後、その立地に注目していた豊臣秀吉が大坂城を建築するとともに、城下町を整備し、今日の大阪の繁栄に引き継がれた[1)]。

「推定地」とされるのは、秀吉による大阪城築城、さらには大坂夏の陣の後、徳川による大規模の工事によって、当寺院の場所を正確に比定できないことによる[1)]。

参考または引用文献

１）中央区史跡文化事典・改訂版、石山本願寺推定地、p.8-8、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

２）吉井克信、“戦国・中近世移行期における大阪本願寺の呼称「石山」表現をめぐって ”、ヒストリア、153(12)、大阪歴史学会（1996）

３）脇田　修、三好庸隆、芦辺　拓、橋爪紳也、宮元健次、堀田暁生、“歴史都市大阪の魅力”、大阪の歴史、60 号、1-52、大阪市史編纂所(2002)

４）原田伴彦、“石山本願寺城”、岡本良一ほか、朝日カルチャーブックス-11 大阪城 400 年、p.5-32、大阪書籍（1982）

５）フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』ＵＲＬ：
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9F%B3%E5%B1%B1%E6%9C%AC%E9%A1%98%E5%AF%BA

６）中村博司、“第一章 大坂本願寺の時代”、大坂城全史－歴史と構造の謎を解く、21-69、ちくま新書（2018）

７）宮本　又次、“第三章 蓮如と石山御坊”、大阪経済文化史談義、p.50-75、文献出版（1980）

８）木原克司、“豊臣・徳川両氏の大坂城検出遺構とそれをめぐる若干の考察”、大阪の歴史、9 号、73-91、大阪市史編纂所(1983)

９）岡本良一、“特集・大阪おおさかの城と城跡－石山本願寺城”、大阪春秋、46 号、33-37、大阪春秋社（1986）

10）宮本又二、岡本良一、矢内　昭、渡辺　武、中村　浩、伊勢戸佐一郎、“特集・大阪城 400 年－大坂城と城下の成立”、大阪春秋、34 号、14-21、大阪春秋社（1982）

11）岡本良一、原田伴彦、三浦圭一、渡辺　武、北垣聰一郎、“石山本願寺と大坂城をめぐって”、大阪の歴史、9 号、40-72、大阪市史編纂所(1983)

12）“日曜に書く 大阪の過去・現在・未来” 産経新聞（大阪版、朝刊）９面、2015 年 5 月 17 日

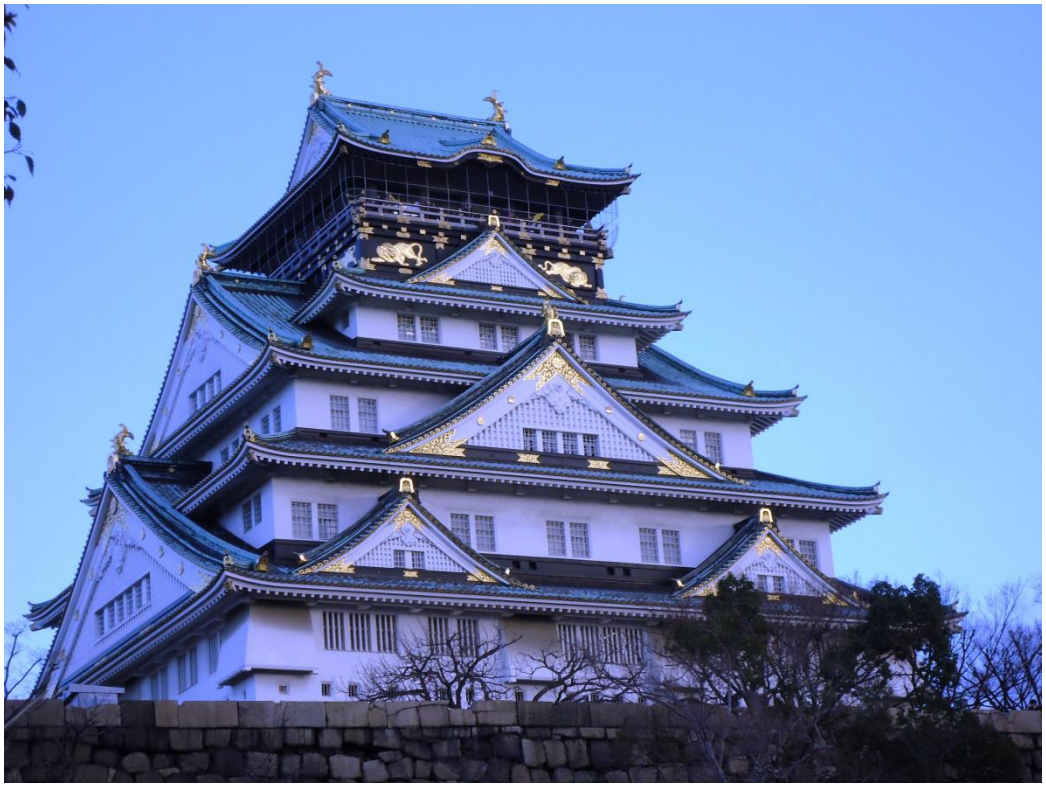
13）井上　薫編、“石山本願寺 三 室町時代の大阪　戦乱の地・浄土の地 中世の大阪”、大阪の歴史、p.120-127、創元社（1986）

14）新修大阪市史編纂委員会編、“第二節 石山本願寺と一向一揆　第五章 戦国・安土の大坂”、新修大阪市史 第２巻、p.617-645、大阪市（1989）

15）井上鋭夫、“石山本願寺の繁栄 ２ 本願寺教団の確立　第四章 戦国動乱と本願寺”、本願寺、206-211、講談社学術文庫（2008）

16）大阪市史編纂所編、“１．大坂本願寺　第４章　織田・豊臣時代の大阪”、大阪市の歴史、p.120-127、大阪市（1999）
17）新修大阪市史編纂委員会編、“第三節 統一政権と石山本願寺　第五章 戦国・安土の大坂”、新修大阪市史 第２巻、p.646-685、大阪市（1989）

７．大坂城/大阪城



大坂城/大阪城[1)]
［中央区大阪城］

大坂城の前史としては、大坂御坊・大坂本願寺の時代があげられる。浄土真宗本願寺八世の蓮如が晩年に営んだ大坂御坊はその 30 余年を経て、十世証如（しょうにょ）が山科（やましな）にあった本願寺を当地に移し、新たな本山とした[2)]。その後の大坂本願寺は隆盛を極めるが、やがて、織田信長の介入に端を発し、「石山合戦」終結の結果、十一世顕如らは御坊退去を余儀なくされる[2～7)]。

本願寺の大坂退去を受けて、織田信長は丹羽長秀（にわながひで）ら重臣を配して、跡地を守備させたものの、本能寺の変によって志し半ばに倒れた。清州（きよす）会議の結果、新たに池田恒興（つねおき）が大坂を領し、あわせて約３年の期間を経た[8)]。

この後、羽柴秀吉が賤ヶ岳（しずがたけ）合戦などを経て、亡主織田信長の後継者としての地位を確立し、本願寺跡地を活用しながら修復し、城下町の整備も行い、長らく豊臣政権の本拠地としての機能を有していた。秀吉は晩年にいたるまで城下町の改造・整備にあたり、秀頼の時代まで引き継がれたが[9～11)]、大坂冬の陣では大坂城の拡張を行って、徳川氏に敗れ、大坂城は灰燼に帰した[4、10～15)]。

大坂の陣で豊臣家が滅びた後、新たな大坂城主に抜擢された徳川家康の外孫松平忠明によって大坂城の改修と市街地の開発・整備がなされた[4、15～19)]。

徳川二代将軍秀忠は江戸幕府の西国支配において、要衝の地であるとの認識から忠

明を大和郡山十二万石の城主として移封し、大坂城と大坂の街を直轄化したうえで、西国・北国の諸大名に命じて、三期 11 年におよぶ大々的な再築工事を起こした。大坂城再築にあたり、普請総指図役となった藤堂高虎事績を記した『藤家忠勤録』から、秀忠と藤堂高虎が秀吉築城による大坂城（「旧城」）を意識して、それに倍加する規模での大坂城再築目指したことが読み取れる[4、20~22]。

1615（慶長 20）年の大坂夏の陣での落城後、大坂城は幕府の直轄となり、1620（元和６）年再建がなされた。しかし、1665（寛文５）年の落雷以後約 270 年間、天守閣は存在しなかったことを知る人は少ない[1]。

江戸時代の政権の安定期に入った大坂は将軍家の別邸として使用された[1、21]。

明治に入って、大阪は政府のもとで軍都としてスタートし、大阪城内にも多くの軍事施設が立ち並んだ[1]。

一方で大正末年頃から大阪城公園の開設と天守閣復興の機運が高まり、多くの市民の支持を得て、1931（昭和６）年に実現した[1、23]。その後、戦争による甚大な被害を受けながらも、戦後には市民の憩いの場として、また国内外から多数の観光客を迎える場としてにぎわっている[1、24]。

参考または引用文献

１）中央区史跡文化事典・改訂版、大阪城、p.26-26、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

２）中村博司、“第一章 大坂本願寺の時代”、大坂城全史－歴史と構造の謎を解く、21-69、ちくま新書（2018）

３）岡本良一、“特集・大阪おおさかの城と城跡－石山本願寺城”、大阪春秋、46 号、33-37、大阪春秋社（1986）

４）岡本良一、原田伴彦、三浦圭一、渡辺　武、北垣聰一郎、“石山本願寺と大坂城をめぐって”、大阪の歴史、9 号、40-72、大阪市史編纂所(1983)

５）井上鋭夫、“石山本願寺の繁栄　２　本願寺教団の確立　第四章 戦国動乱と本願寺”、本願寺、206-211、講談社学術文庫（2008）

６）井上　薫編、“石山本願寺 三 室町時代の大阪　戦乱の地・浄土の地 中世の大阪”、大阪の歴史、p.120-127、創元社（1986）

７）大阪市史編纂所編、“１．大阪本願寺　第４章　織田・豊臣時代の大阪”、大阪市の歴史、p.120-127、大阪市（1999）

８）中村博司、“第二章 番城の時代”、大坂城全史－歴史と構造の謎を解く、71-85、ちくま新書（2018）

９）鈴木秀典、“豊臣時代の大坂城本丸の調査”、大阪の歴史、16 号、77-90、大阪市史編纂所(1985)
10）中村博司、“第三章 豊臣秀吉・秀頼の時代”、大坂城全史－歴史と構造の謎を解く、87-198、ちくま新書（2018）
11）新修大阪市史編纂委員会編、“第一章 城下の建設”、新修大阪市史 第３巻、p.1-168、大阪市（1989）
12）原田伴彦、“石山本願寺城”、岡本良一ほか、朝日カルチャーブックス-11 大阪城 400 年、p.33-182、大阪書籍（1982）
13）井上　薫編、“ 一 寺内町から城下町へ　天下の台所として 近世の大阪”、大阪の歴史、p.233-248、創元社（1986）
14）大阪市史編纂所編、“２．豊臣秀吉と大坂の建設　第４章　織田・豊臣時代の大阪～１．豊臣家の滅亡　第５章　大阪の近世”、大阪市の歴史、p.128-150、大阪市（1999）
15）宮本又二、岡本良一、矢内　昭、渡辺　武、中村　浩、伊勢戸佐一郎、“特集・大阪城 400 年－大坂城と城下の成立”、大阪春秋、34 号、14-21、大阪春秋社（1982）
16）新修大阪市史編纂委員会編、“第一章 復興と整備”、新修大阪市史 第３巻、p.169-389、大阪市（1989）
17）中村博司、“第四章 松平忠明の時代”、大坂城全史－歴史と構造の謎を解く、199-215、ちくま新書（2018）
18）井上　薫編、“ 大阪の復興　二 天下の台所　天下の台所として 近世の大阪”、大阪の歴史、p.248-252、創元社（1986）
19）大阪市史編纂所編、“城下町大坂の建設　２．大坂と大坂城の再建　第５章　大阪の近世”、大阪市の歴史、p.150-153、大阪市（1999）
20）中村博司、“第五章 徳川秀忠による大阪城再築工事”、大坂城全史－歴史と構造の謎を解く、217-264、ちくま新書（2018）
21）井上　薫編、“ 大阪城再建　二 天下の台所　天下の台所として 近世の大阪”、大阪の歴史、p.252-253、創元社（1986）
22）大阪市史編纂所編、“幕府直轄領～大坂城再建　２．大坂と大坂城の再建　第５章　大阪の近世”、大阪市の歴史、p.153-158、大阪市（1999）
23）中村博司、“第六章 徳川時代の大阪城と城下町”、大坂城全史－歴史と構造の謎を解く、269-312、ちくま新書（2018）
24）中村博司、“第七章 近代の大阪城と天守閣復興”、大坂城全史－歴史と構造の謎を解く、314-340、ちくま新書（2018）

８．大阪銀座跡

大阪銀座跡[1)]
中央区東高麗橋２番 37　三精ビル前

銀座の起源は 1598（慶長３）年、徳川家康が伏見に銀貨鋳造所を設けたことに始まる[2)]。

高麗橋の東詰に銀座が位置していた。東詰めは船場ではないが、地続きの地であって、船場とは関連が深い。大阪に銀座がおかれたのは伏見銀座の京都移転と同年の 1608（慶長 13）年のことであった[3，4)]。

両替商の金融を検討すると、まずは両替商の発生源のひとつは、銀座である。高麗橋内両替町といわれるのは高麗橋の東詰から天満橋までの間である。銀座のある町を世人が両替町と称したのは、銀座が諸国灰吹銀を買い集めて、代わりに銀座で鋳造した丁・小豆銀をを交付するという両替の業務を行ったことによる[4)]。

国内の銀座は初め伏見と駿河にあったのが、後伏見は京都に、駿河は江戸京橋に移され（1612（慶長 17）年)、長崎にも銀座が設けられた[3)]。

ただし、大阪の銀座は銀貨を鋳造するところではなく、京都の銀座出見世（出店）であった[4)]。

大阪の銀座の役割については、必ずしも明らかではないが、その分局に銅座をもったことは特筆に値する[3)]。

参考または引用文献

１）中央区史跡文化事典・改訂版、大阪銀座跡、p.20-21、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

２）大阪市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護担当　42. 大阪銀座（ぎんざ）跡
ＵＲＬ：http://www.city.osaka.lg.jp/kensetsu/page/0000009640.html

３）宮本又二、“一四 銀座と三井両替屋　第三章 今橋・高麗橋の巻”、船場 風土記大阪 第一集、p.141-145、ミネルヴァ書房（1960）

４）新修大阪市史編纂委員会編、“第八節 金融 第二章 復興と整備”、新修大阪市史 第３巻、p.363-376、大阪市（1989）

９．少彦名神社・くすりの道修町資料館

少彦名神社[1)]

くすりの道修町資料館[2)]

中央区道修町二丁目１番８号

大阪･船場道修町に位置する少彦名神社は神農さんとも呼ばれ、親しまれている[1)]。

江戸時代、薬種商は、中国医薬の祖とされる神農氏の像や掛軸を床の間に祀っていた。当時長崎から輸入される唐薬種（漢薬）の真贋や品質の見極めが難しかったことによる[1)]。その後、和薬種（国産薬）の取扱い量が増加した[1)]。

1780（安永９）年に京都の五條天神宮より本邦の薬種の神様、少名彦命の分霊の勧請がなされ、当神社において従来より祀られていた神農氏と合祀された[1、2)]。

神社の入口の注連柱の横に金色の虎の像がある。1822（文政５）年、日本でコレラが大流行した際、道修町の薬種商仲間が疫病除薬として、虎の頭骨を配合した「虎頭殺鬼雄黄圓」という丸薬を無料で施した。そのとき、張子の虎をつくり、丸薬とともに神前で祈願をし、病除祈願のお守りとして、あわせて施与された[1、2)]。

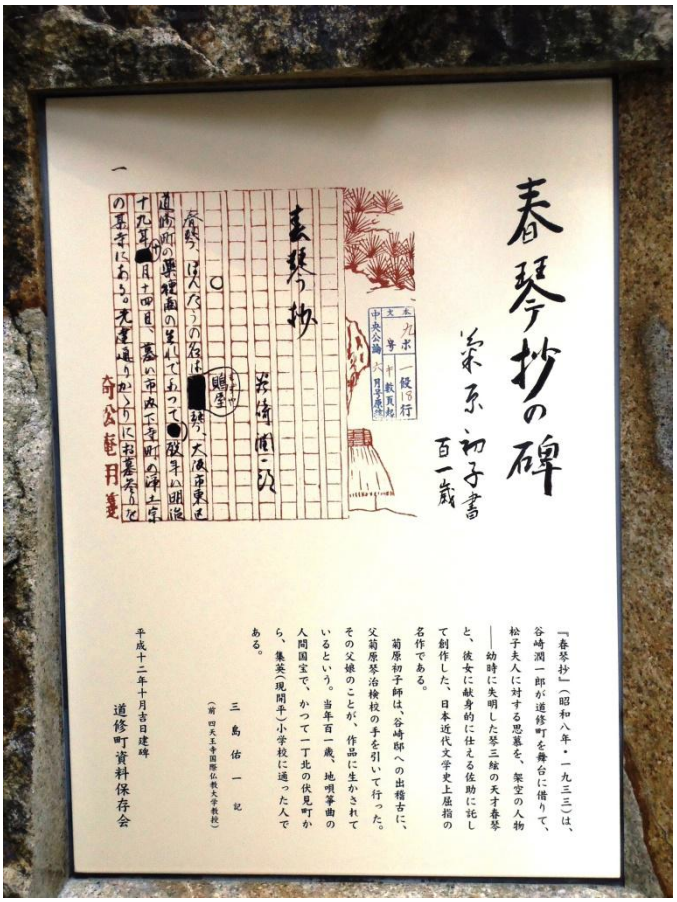
以来、「張子の虎」は毎年、11 月 22 日、23 日に行われる神農祭のシンボルとして人口に膾炙して知られるようになった。

大阪の祭りが１月の「十日えびす」で始まり、神農祭で終わりことから、神農祭を「とめの祭り」とも呼ばれている[1)]。

道修町の寄合所には 350 年前から道修町に関する貴重な資料が保存されてきた[3)]。

1997（平成９）年 10 月、これらの資料を公開するための資料館が社務所の３階に開設された。道修町の歴史を映像や展示品でみることができる[4)]。

「道修町文書」は薬種中買仲間の成立から解散までに「近世文書」と、明治維新から昭和終戦までの「近代文書」からなる膨大な一括文書であり、江戸時代の株仲間のようすが知れる[4)]。



春琴抄の碑[3]

当神社は全国でも比類のない貴重な文化財であり、2007（平成 19）年に大阪市の有形文化財に指定された[3]。

また、谷崎潤一郎（たにざきじゅんいちろう）の道修町を舞台にした作品『春琴抄』の自筆原稿（復刻版）も展示されている。参道の入口には「春琴抄」の碑が建っている[3、5]。

参考または引用文献

1）中央区史跡文化事典・改訂版、少彦名神社、p.65-66、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

2）中央区史跡文化事典・改訂版、くすりの道修町資料館、p.49-50、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

3）少彦名神社(大阪市) - Wikipedia
URL: https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B0%91%E5%BD%A6%E5%90%8D%E7%A5%9E%E7%A4%BE_(%E5%A4%A7%E9%98%AA%E5%B8%82)

4）くすりの道修町資料館 - Wikipedia
URL: https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%8F%E3%81%99%E3%82%8A%E3%81%AE%E9%81%93%E4%BF%AE%E7%94%BA%E8%B3%87%E6%96%99%E9%A4%A8

５）三島佑一、“特集 大阪歴史の散歩道　「春琴抄」と道修町”、52 号、39-43、大阪春秋社（1988）

10. 大阪薬科大学発祥の地

大阪薬科大学発祥の地の記念碑[1)]
中央区道修町 3-1-8　**塩野義製薬株式会社 本社**

大阪道修薬学校が 1904（明治 37）年５月９日、大阪府から正式の設立認可を受けた[1～3)]。大阪薬科大学発祥の地は大阪市東区（現中央区）道修町３丁目住民の共有地であり、町内の会所であった[1、4)]。ここをそこを借り受けてのスタートであった。

現在、この地は塩野義製薬株式会社の敷地内にある。

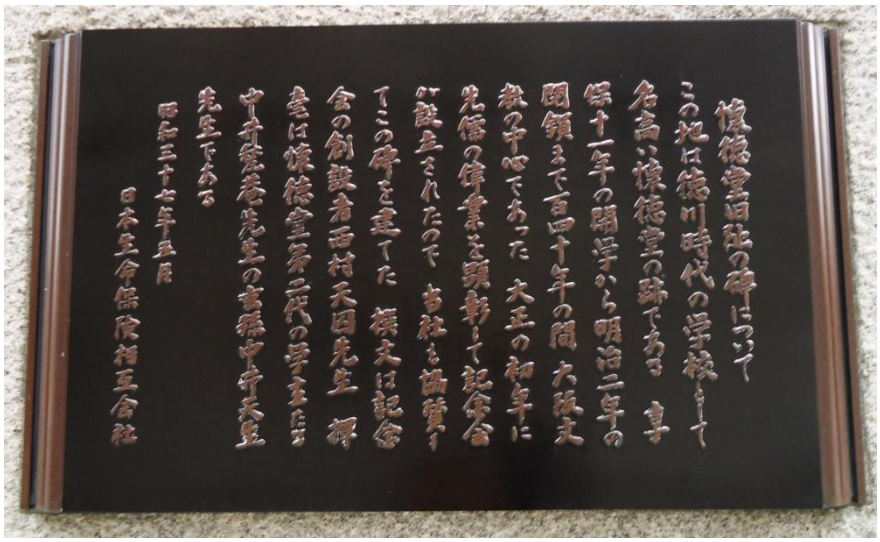
当大学の創立百周年を記念して、塩野義製薬株式会社本社ビルの玄関脇に、「大阪薬科大学発祥の地の記念碑」が建立された[1)]。

当大学の発祥には、当時道修町の薬業家らによる理解と協力が背景にあった[4)]。

参考または引用文献

１）大阪薬科大学　発祥の地の記念碑
ＵＲＬ：https://www.oups.ac.jp/annai/syoukai/kinenhi.html
２）大阪薬科大学　大学紹介　沿革　明治 37 年創始から今日までの本学の歩み
ＵＲＬ：https://www.oups.ac.jp/annai/syoukai/history.html
３）大阪薬科大学発祥の地
ＵＲＬ：https://www.hamadayori.com/hass-col/school/OsakaYakkadai.htm
４）三島佑一、薬の大阪道修町 今むかし、和泉書院（2006）

11. 懐徳堂旧阯碑



懐徳堂旧阯碑[1、2)]

（中央区今橋三丁目５番
日本生命保険ビル南壁面）

1724（享保９）年、三宅石庵（みやけせきあん）と中井甃庵（なかいしゅうあん）を教授にむかえ[3)]、５人の町人（五同志）が出資し、町人のための私塾 懐徳堂を創設した[2、4～7)]。教養としての学問ではなく、実用的な学問を教授した。朱子学を中心としながら、各派の説も取り入れる自由な学風は、大坂人に合っていたといわれている。２年後、甃庵らの奔走により、幕府から大坂学問所として公認された。このことによって、懐徳堂は江戸の官学昌平黌に匹敵するものといわれた[6、8～10)]。なお、懐徳堂の名の由来は、『論語』、『詩経』、『書経』からとする諸説があり、推測の域を出ない[1、2)]。

武士が幅をきかせていた江戸時代にあっても、大坂では武士は人口の１割にも満たず、民主主義の精神があった。懐徳堂では、武士が教室の上座に座る習慣をなくして自由にした。貧しくても学ぶ意欲があれば講義に出席できるようにし、商人の都合に合わせて早退、遅刻もできた。当時は「商売」をさげすむ風潮が強かったが、懐徳堂では「商売」を評価し、何よりも大切な「人の道」を説いた[1、2)]。やがて全国でも有名な塾へと発展を遂げ、富永仲基（とみながなかもと）、山片蟠桃（やまがたばんとう）はじめ多くの知識人を輩出した[4，5、11、12)]。

140 年以上の歴史を築いた懐徳堂は 1869（明治２）年、閉塾に追い込まれる。しかし、西村時彦（にしむらときつね）（「天声人語」の名付け親）が中心になり、財界の協力を得て 1916（大正５）年、場所を移し再建された[13)]。碑についてはもとの懐徳堂の地に建てられている[1、2)]。

1945（昭和 20）年、大阪空襲により懐徳堂は鉄筋３階建ての書庫を残して焼失し

た。蔵書３万 6000 冊は、すべて大阪大学に寄贈され、懐徳堂文庫となり、現在も管理・研究が行われている[1、2)]。

大正のはじめ頃、日本生命保険相互会社に「懐徳堂旧阯の碑」が設けられた[9、12)]。西村時彦が文章を選び、甃庵の玄孫（やしゃご）の中井天生（なかいてんせい）が筆をとった[2、13)]。

参考または引用文献

１）中央区史跡文化事典・改訂版、懐徳堂旧阯碑、p.36-37、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

２）大阪市中央区　懐徳堂旧阯碑
ＵＲＬ：https://osaka-chushin.jp/spot/35365

３）宮本又二、“五 今橋と懐徳堂のあと　第二章 今橋・高麗橋の巻”、船場 風土記大阪 第一集、p.108-114、ミネルヴァ書房（1960）

４）大阪大学総合学術博物館編、「見る化学」の歴史―懐徳堂・中井履軒の目―、大阪大学出版会（2006）

５）三島佑一、“11. 大阪一は「天下の学問のまり」だった”、大阪オーラ 日本を予見する日本のハート 上方文庫別巻シリーズ４、118－126、和泉書院（2010）

６）脇田　修、岸田知子、懐徳堂とその人々、大阪大学出版会（1997）

７）宮本又二、“第八章 懐徳堂と大阪の町人たち”、大阪経済文化史談義、p.146-158、文献出版（1980）

８）宮川康子、自由学問都市 大坂―懐徳堂と日本的理性の誕生―、講談社（2002）

９）作道洋太郎、“懐徳堂の経済思想―草間直方『三貨図彙』について―”、大阪の歴史、４号、p.1-15、大阪市史編纂所（1981）

10）大月　明、作道洋太郎、津田秀夫、原田伴彦、“近世の大阪文化を語る”、大阪の歴史、４号、p.52-73、大阪市史編纂所（1981）

11）新修大阪市史編纂委員会編、“２ 懐徳堂の学問　第七節 町人と学問　第二章 停滞と変容”、新修大阪市史 第４巻、p.332-339、大阪市（1990）

12）新修大阪市史編纂委員会編、“２ 和学　３ 漢学　第一節 学問　第五章 近世前期の文化”、新修大阪市史 第３巻、p.871-891、大阪市（1989）

13）小川　功、“日本生命本店の軌跡と懐徳堂・適塾など”、大阪の歴史、27 号、p.73-85、大阪市史編纂所（1989）

14）湯浅邦弘編著、増補改訂版 懐徳堂事典、大阪大学出版会（2016）

15）懐徳堂 – Wikipedia

ＵＲＬ：https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%87%90%E5%BE%B3%E5%A0%82

12. 銅座の跡

銅座の跡[1)]
中央区今橋三丁目１番　愛珠幼稚園前

江戸時代、銅はわが国の重要な輸出品であった[2)]。1750（寛延３）年に長崎御用銅会所としておかれ、1766（明和３）年に設置[5、4)]された銅座の役割は、まず銅山からの荒銅を当所で買上げ、当時大坂で技術を競っていた銅吹仲間に精練させ[3)]（住友銅吹所の項参照)、それを集荷して海路長崎へ回送するものであった[5)]。つまるところ、銅座は銅の精錬および売買を管轄したところであった[3)]。

また、銅の密売を防ぐため古銅類買上げの精細な規定がつくられ、銅器の破片に至るまで銅座が管理した[1、2)]。

なお、建碑のある大阪市立愛珠（あいしゅ）幼稚園は、1880（明治 13 年）に開園し、市内現存する最古の幼稚園で現園舎は 1901（明治 34）年竣工のものである[6、7)]。

参考または引用文献

１）中央区史跡文化事典・改訂版、銅座の跡、p.81-81、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

２）大阪市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護担当　27. 銅座（どうざ）の跡
ＵＲＬ：http://www.city.osaka.lg.jp/kensetsu/page/0000009604.html

３）宮本又二、“八 銅座　第二章 北浜の巻”、船場 風土記大阪 第一集、p.52-55、ミネルヴァ書房（1960）
４）宮本又二、“一、 銅座の荒廃と変遷　第十四章 銅座と住友とシーボルト”、大阪経済文化史談義、p.243-245、文献出版（1980）
５）宮本又二、“７　銅貿易と友芳　第七章 住友友以と友芳”、大阪商人、p.201-205、講談社学術文庫（2010）
６）中央区史跡文化事典・改訂版、愛珠幼稚園、p.1-2、大阪中央区役所発行（平成22年11月発行）
７）大阪市立開平小学校教職員編集、わが町 船場　―いま・むかし―、大阪市立開平小学校（1994）

13. 適塾

緒方洪庵適塾および旧宅跡碑[1、2)]

緒方洪庵像

中央区北浜三丁目３番８号

緒方洪庵（1810～1863）は備中足守藩（今の岡山市内）の佐伯惟因（いいん）の第三子として生まれ、田上辟（せい）之助と名づけられた[3～5)]。

16 歳のときに父が大阪の蔵屋敷の留守居になったので、それに従って上阪した。翌年父は帰郷したが、彼は再び上阪して中天游の門に入り、蘭方医学を修行し、田上姓を緒方姓に改めた。

1830（天保元）年４月、洪庵は天游の勧めによって、江戸遊学に出発した。江戸においては、坪井信道[5)]の門に入り、蘭語を学び、坪井塾の塾頭となった坪井塾にあること４年で大阪にいで、1836（天保７）年には長崎に遊学し、この時洪庵と称した[3)]。1838（天保９）年１月帰郷、直ちに大阪にいで、瓦町にて開業した[3)]。しかし、この瓦町の宅は狭隘であったので 1843（天保 14）年 12 月に過書町（現中央区北浜）の町家を購入して移転した[3)]。ここはもと天王寺屋五兵衛の分家忠兵衛の持家であって、江戸時代の商家の構造を今に伝えていることから、珍重するべきものである[3)]。

洪庵はまた、別に尼崎一丁目（現中央区今橋三丁目）に新しく除痘館を移した。ここは今の今の緒方ビルクリニックセンターである。洪庵は、大阪で最初の種痘を実施するなど医学者としても活躍した[6)]。

「適塾」の称は、洪庵の号「適々斎」に基づいている。すなわち、「適々斎塾」の

塾、略して「適々塾」よりさらに「適塾」と呼ばれた[3)]。二階建て、間口約六間半、奥行き約二十二間の長方形の地を占めており一、二階とも当時とはあまり変更されていないそうである[3)]。段梯子をのぼると二十八畳の天井のない畳敷の大部屋があるが、これが蘭学教場であり、かつては大小およそ五十畳の塾部屋であったらしいが、大正時代の軒切工事のため、二室三十六畳になったという[3)]。

緒方洪庵旧宅および適塾跡[1、2)]
中央区北浜三丁目３番８号

塾生は刻苦勉励したが、血気盛んなところもあり、蘭学教場のなかほどに立っている一本の傷だらけの柱の刀傷もあり、塾生たちの青春を物語っているようだ[1、3)]。ことに蘭学に志すものには旧来の文物の反抗の精神を抱くものが多かったために飲酒・喧嘩もまた、常のことであったらしい。とりわけ、会読の終った日などは解放された喜びから街に出て、狼藉をはたらいたことなどが『福翁自伝』に詳記されている[3)]。

適塾で学んだ人材緒方郁蔵、大村益次郎、箕作秋坪（みつくりしゅうへい）、佐野常民、橋本左内、大鳥圭介、長与専斎、福沢諭吉、緒方惟準（いじゅん）らがいる[6、7)]。

適塾は洪庵が幕府に召されて後も、養子緒方拙斎の居住するところとなり、明治の中葉までここで医業を行っていたが、後洪庵の六男収二郎の所有に帰し、大正末年まで住宅となり、他に貸与され、華陽堂病院となって昭和年間に及んだ[3)]。

1942（昭和 17）年、緒方家よりこの建物を受継いだ日本生命の社長成瀬達氏より大阪大学に寄附された[3)]。

この史跡については、今に大阪の文運の深くかつ遠いことを物語るものであり、幾多の人材がここから輩出し、明治の文運に寄与したことは特筆大書すべきことである[3)]。

参考または引用文献

１）中央区史跡文化事典・改訂版、適塾、p.78-78、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

２）大阪市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護担当　26. 緒方洪庵（おがたこうあん）旧宅および塾（適塾）（てきじゅく）　重要文化財
ＵＲＬ：http://www.city.osaka.lg.jp/kensetsu/page/0000009601.html

３）宮本又二、“九 適塾　第二章 北浜の巻”、船場 風土記大阪 第一集、p.55-59、ミネルヴァ書房（1960）

４）大阪町名研究会編、“北浜一～五丁目 東区 第二部 町名のうつりかわり”、大阪の町名―大坂三郷から東西南北四区へ―、p.117～122、清文堂（1977）

５）梅渓　昇、“特集 緒方洪庵誕生 200 年―混迷の時代を生きる―”、16-23、大阪春秋社（2010）

６）新修大阪市史編纂委員会編、“３ 幕末の洋学 第二節 洋学　第四章 近世後期の文化”、新修大阪市史 第４巻、p.688-695、大阪市（1990）

７）“いい日本みつけた　適塾１”、産経新聞（大阪版　朝刊）、22 面、2017 年３月 19 日

８）適塾 -Wikipedia
ＵＲＬ：https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%81%A9%E5%A1%BE

９）大阪大学　適塾記念センター
ＵＲＬ：http://www.tekijuku.osaka-u.ac.jp/

10）大阪大学　大学案内　適塾
ＵＲＬ：https://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/about/tekijuku

14. 除痘館跡

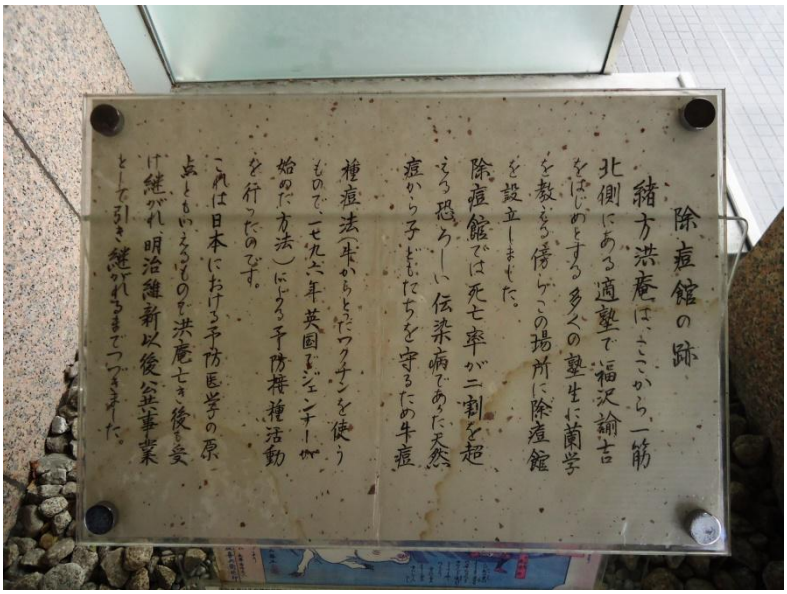
除痘館の跡[1)]

除痘館跡[1)]

緒方ビルクリニックセンター敷地内
［中央区今橋三丁目２番 17 号］

緒方洪庵（おがたこうあん）は、1838（天保９）年、現在の北浜三丁目に私塾として適塾を開いた[2)]。

また、洪庵は当時多数の死亡者を出していた天然痘を予防するため、1849（嘉永２）年、古手町（現在道修町四丁目）には新しく除痘館（私立種痘所）を開業し、種痘を施行した[4、5)]。



除痘館の跡[1)]
緒方ビルクリニックセンター敷地内

緒方ビルクリニックセンター

［中央区今橋三丁目２番 17 号］

その後、1860（万延元）年に尼崎一丁目（現在の今橋三丁目）に除痘館を写し、日本全国に種痘ワクチンを届け、幅広く活動の拠点とした。ここは今の緒方ビルクリニックセンターである[6)]。

洪庵は種痘を広め、天然痘の根絶に貢献し、教育者としても総合的な人材を育成した[2)]。

1980（昭和 55）年５月８日、WHO（World Health Organization、世界保健機関）は、天然痘（痘瘡）が撲滅されたことを高らかに宣言した。以来、長きにわたって、人類に惨禍をもたらした天然痘（痘瘡）は、現在地球上から姿を消している[7)]。

なお、古手町の除痘館の跡地付近（道修町４丁目４番）にも「除痘館発祥の地」碑が建立された。

参考または引用文献

１）中央区史跡文化事典・改訂版、除痘館跡、p.64-64、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

２）宮本又二、“九 適塾　第二章 北浜の巻”、船場 風土記大阪 第一集、p.55-59、ミネルヴァ書房（1960）

３）新修大阪市史編纂委員会編、“３ 幕末の洋学 第二節 洋学　第四章 近世後期の文化”、新修大阪市史 第４巻、p.688-695、大阪市（1990）

４）古西義麿、“特集・緒方洪庵誕生 200 年　緒方洪庵と大坂の除痘館―除痘館を支えたのはだれ？―”、大阪春秋、139 号、36-40、大阪春秋社（2010）

５）緒方洪庵記念財団編集、緒方洪庵の「除痘館記録」を読み解く、思文閣（2015）

６）緒方洪庵記念財団 緒方ビルクリニックセンター　施設の特徴
ＵＲＬ：http://www.klinik-ogata.or.jp/ogata_building/floor/4f-01html.html

７）財団法人・洪庵記念会 除痘館記念資料室編集・発行、緒方洪庵誕生 200 年記念 大阪の除痘館＜改訂・増補版＞、2011

15. 北組惣会所跡・南組惣会所跡

北組惣会所跡・南組惣会所跡[1)]
北組／中央区平野町三丁目４番
南組／中央区農人橋一丁目１番

江戸時代の大坂は、大川以北の天満組と、それ以南の２組（北組・南組）に区分され、その３組を総称して大坂三郷と呼ばれていた[1、2)]。それぞれの組には惣会所（執務所）が設けられ、ある程度の自治が許されていた[2)]。惣会所には惣年寄以下の役職者が事務にあたり、また町ごとに町会所もあり各種の通達連絡網がしかれていた[2)]。

惣会所の地所は幕府より下賜され、惣会所の諸費用はこれに属する各々の町で負担した[3)]。

各組の惣会所には運営の中心となる惣年寄がおり、そのしたで惣代が実務を担っていた[1、3)]。惣年寄は町奉行ののもとで年貢の取立て、御触（おふれ）の通達、町年寄の任命、火消しの人手の指揮など、現在の市役所・司法・消防・警察などの職務を担当した[3)]。この制度は大阪・岡山・高知・鹿児島などにみられ、江戸時代のはじめ頃の 1619（元和２）年から明治のはじめまで続いた[1)]。

北組惣会所跡の石碑については 1919（大正８）年、南組惣会所跡の石碑については 1962（昭和 37）年に建立された[1)]。

参考または引用文献

１）中央区史跡文化事典・改訂版、北組惣会所跡・南組惣会所跡、p.43-43、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

２）大阪市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護担当　33. 天満組惣会所（そうかいしょ）跡
ＵＲＬ：http://www.city.osaka.lg.jp/kensetsu/page/0000009955.html

３）宮本又二、“八 惣会所　第一章 船場概観”、船場 風土記大阪 第一集、p.30-32、ミネルヴァ書房（1960）

16. 八軒屋船着場の跡

八軒屋船着場の跡[1)]
[中央区天満橋京町２番　**永田屋昆布本店前**]

この地は江戸時代に８軒の船宿があったため、八軒家と呼ばれ、淀川を伏見との間で往来し、上り下りの三十石船の発着場でにぎわい、十返舎一九（じっぺんしゃいっく）が 1809（文化６）年に発表した『東海道中膝栗毛（とうかいどうちゅうひざくりげ）』にも登場する。

天神橋・天満橋がかけられたのは先立つこと、豊臣時代のことである。江戸時代になってから、難波橋が加えられ、大阪の三大橋として今日にいたっている。

さらには遡って、平安時代より鎌倉時代にかけて、皇族、貴族の、紀州熊野本宮への参詣道（熊野街道）の起点として栄えた。

明治に入ると外輪船が登場し、所要時間も短縮され、鉄道の出現で船による旅客の輸送は終った。

船の輸送の減少とともに、船着場も役割も衰退した。

参考または引用文献

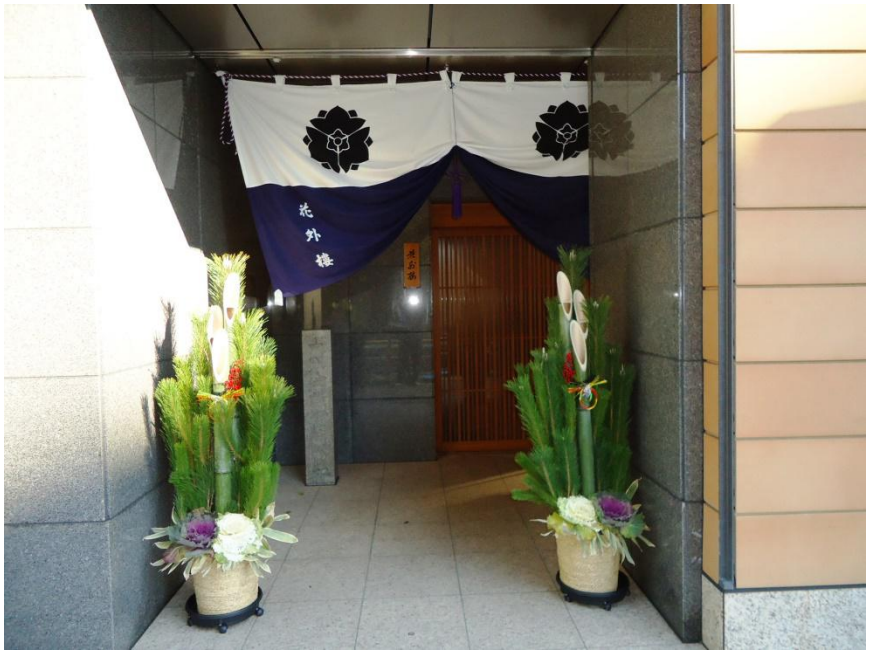
１）中央区史跡文化事典・改訂版、八軒屋船着場の跡、p.94-94、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

２）大阪市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護担当　46. 八軒家（はちけんや）船つき場跡

ＵＲＬ：http://www.city.osaka.lg.jp/kensetsu/page/0000009604.html

３）大阪・天満橋 永田屋昆布本店、八軒家の今昔―熊野街道のはじまり― 熊野古道世界遺産登録録記念

17. 大阪会議開催の地



大阪会議開催の地[1)]
［中央区北浜一丁目１番　**花外楼**］

北浜の土佐堀川に面する老舗料亭『花外楼』の玄関先に「大阪会議開催の地」の石碑がみえる。1830（天保元）年に加賀の国から出てきた伊助が料理旅館『加賀伊』を始めた[2)]。

1875（明治８）年２月 11 日、『加賀伊』において「大阪会議」が開かれた[3～5)]。

当時明治新政府において、内務卿大久保利通を中心に独裁体制を固めていたが、維新の元帥多くが野にあり、反政府的な言動に出たため、大久保らは窮地に追い込まれていた。そこで大久保は台湾遠征に反対して政府を去った木戸孝允や、征韓論で敗れ下野した板垣らを政府に呼び戻そうとした。これを知った井上馨や伊藤博文は、その仲介役を買って出た。こうして、妥協の条件を話し合うことになり、その会合「大阪会議」の舞台が北浜であり、会場が料亭『加賀伊』であった。

ここで4.件の決議と六か条の申合せがなされた。決議では１．元老院（立法機関）の設置、２．大審院（現在の最高裁判所）の設置、３．地方官会議の開催、４．正院（内閣）と各省の分離など、政府の改革を定めた[3、4)]。

会合の後、木戸と板垣の政府復帰も決まり、ふたりとも同年３月に参議となった[4)]。

したがって、この大阪会議は憲政史上、憲政史上画期的なイベントであったといえる[3)]。

一般的には「加賀井」での話合い以前の、２か月間におよぶ個別的な話合いを含め、「大阪会議」と呼ぶ。つまりは「加賀井」においては合意をえる最終の会議がなされたのであった[6)]。

会議の成功を祝して、木戸が『加賀伊』から『花外楼』と命名し、揮毫（きごう）した扁額（へんがく）をが掲げられている[1)]。

しかし、板垣は同年７月の新聞紙条例の改正および讒謗率の制定を動機として 10 月に再び下野し、木戸も翌９年３月に他の内閣諸公との間に意見の齟齬を来し、病に倒れ、1878（明治 11 年）には大久保が暗殺されるが、定まった日本の針路に揺るぎはなかった[7)]。

参考または引用文献

１）中央区史跡文化事典・改訂版、大阪会議開催の地、p.17-17、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

２）日本料理 花外楼 北浜本店パンフレット

３）井上　薫編、“大阪会議と愛国社大阪大会 二 自由民権運動の高まりのなかで よみがえる大阪 近代・現代”、大阪の歴史、p.316-318、創元社（1986）

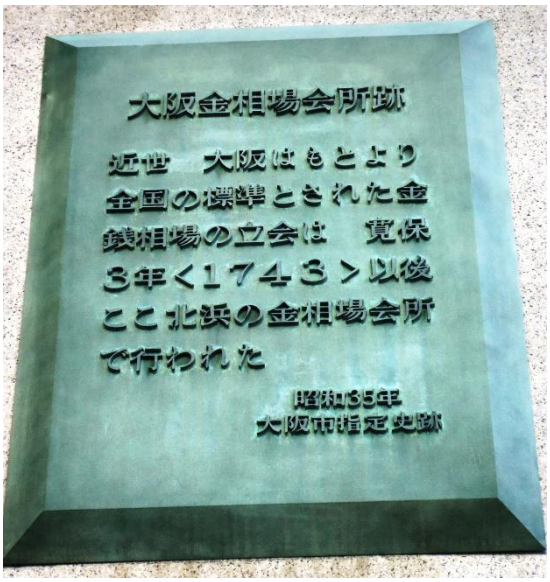
４）大阪市史編纂所編、“自由民権運動　３．地租改正・徴兵令と自由民権運動 第７章　大阪の近代”、大阪市の歴史、p.251-252、大阪市（1999）

５）大谷晃一、“幻の首都 ･大久保利通”、大阪の歴史を歩く、p.192-194、創元社（1985）

６）“はなやか花外「大抵にせい」 北浜　大阪 川と坂の物語”、 産経新聞（大阪版、朝刊）25 面、2008 年 10 月 27 日

７）“日曜に書く「大阪会議はおこがましい」、” 産経新聞（大阪版、朝刊）７面、2015 年 8 月 23 日

18. 大阪金相場会所跡



大阪金相場会所跡[1)]
（大阪証券取引所ビル　正面入口左外壁
中央区北浜一丁目８番）

堺筋の東側浜筋の角、現在の大阪証券取引所の敷地に江戸時代には金相場会所があり、このあたりを一名金相場の浜といった（『摂津名所図会大成』）。金相場会所とは金銀銭三貨が通用していた江戸時代において、この三貨を売買するところであり、本両替屋が集って相場を立てたところである[2、3)]。

当時の貨幣制度は、大別すると計数制と秤量制であった。金は両（りょう）、銭は貫（かん）、銀は秤ではかる匁（もんめ）など複雑な面があった。その上、関西は銭、関東は金と流通範囲が自然に分かれていた。そして相互の交換は法定されてはいたもののあまり信用されず、実際には相場が立てられそれが標準になった。そのため金相場の会所は存在価値が高かった[4)]。

大阪には古くから金銭売買会所というものが、高麗橋筋にあった。これが 1743（寛保３）年に現地に移り、維新後、銀目取引廃止にともない閉鎖された。

金相場会所跡に大阪株式取引所ができたのは 1878（明治 11）年である[2，5)]。1894（明治 27）年に北浜街最初の洋館となり、さらに 1899（明治 32 年）に新しい取引所の建築物が建設された[2)]。1907（明治 40）年前後からこの界隈に株式取引人（仲買人）の洋館が立ち並ぶようになり、株屋街になっていったのである[2，5)]。

参考または引用文献

１）中央区史跡文化事典・改訂版、大阪金相場会所跡、p.21-22、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

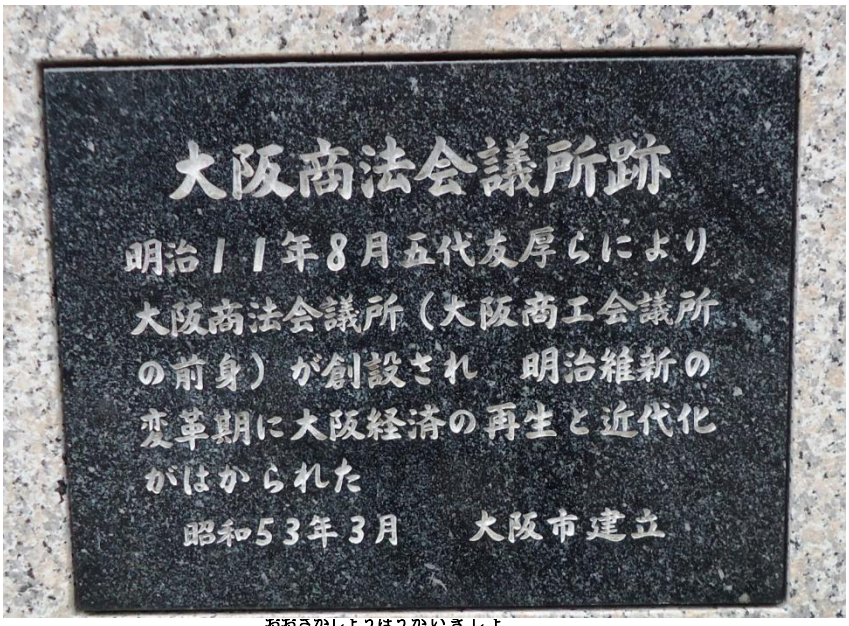
２）大阪町名研究会編、“北浜一～五丁目 東区 第二部 町名のうつりかわり”、大阪の町名―大坂三郷から東西南北四区へ―、p.117～122、清文堂（1977）

３）新修大阪市史編纂委員会編、“第五節 貨幣と金融 第三章 幕末の動揺”、新修大阪市史 第４巻、p.483-501、大阪市（1990）

４）大阪市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護担当、35. 大阪金相場会所（きんそうばかいしょ）跡 URL：http://www.city.osaka.lg.jp/kensetsu/page/0000009620.html

５）宮本又二、“一 金相場会所　第二章 北浜の巻”、船場 風土記大阪 第一集、p.35-38、ミネルヴァ書房（1960）

19. 大阪商法会議所跡、五代友厚君像、大阪証券取引所ビル



大阪商法会議所跡[1)]
（中央区高麗橋三丁目２番
三菱 UFJ 銀行大阪営業部北東角）

五代友厚君像[2)]
（中央区本町橋２番
大阪商工会議所前）

大阪証券取引所ビル[3)]
中央区北浜一丁目８番 16 号

明治初年の大阪は、銀目の廃止、御用金、蔵屋敷の廃止などで、経済的に大きな打撃を受けた[4)]。このため大阪の経済復興に刺激を与える気運が高まり、1878（明治 11）年４月には大阪株式取引所を創立し、同年８月に大阪商法会議所の開設をみた。会議所を組織し、初代会頭となったのは五代友厚（1836～1885 年）であった[4)]。

薩摩藩士であった五代[5)]は 1868（慶応４）年には新政府の参与となり、大阪府判事と外国官権判事となり大阪での当時の沈滞した沈滞した大阪経済のなかで、五代らの情熱とすぐれた経済感覚により建て直しがはかられ、今日の大阪発展の基礎を確立した[4、5)]。

後、官を辞した五代は西成郡今宮村で金銀分析所を開設した[6)]。これは当時造幣局建設の背景があった。五代は続いて、鉱山の開発に着手し[7)]、1876（明治９）年には堂島浜通に製藍事業を起したが、明治 16 年には、輸入品におされ製藍は閉鎖された[6)]。

また、五代は1880（明治13）年には大阪商業講習所を設立し[8)]、翌年には府立となり、1885（明治18）年には府立商業学校となった。さらに1889（明治22）年には市制施行にともない、市立大阪商業学校となった。1901（明治34）年には市立大阪高等商業学校に昇格し、1928（昭和３）年に大阪商科大学になった（現大阪市立大学）[8)]。

近代日本を飛躍させた実業家として、「東の渋沢、西の五代」と、五代は渋沢栄一（しぶさわえいいち）と並び称される[9)]。

先の大阪株式取引所の名称は大阪証券取引所から現在大阪取引所へと変遷し、大阪商法会議所は1925（昭和８）年には名称も大阪商工会議所となり、現在にいたっている。松屋町筋にある当会議所ビルの傍には五代友厚らの像がある。同様に北浜のランドマークの存在としての大阪証券取引所ビルの傍にも五代友厚の像がある[10)]。

2015年９月28日から2016年４月２日に放送されたNHK「連続テレビ小説」（朝ドラ）『あさが来た』では、俳優ディーン・フジオカ[11)]が演じる五代友厚が人気を集め、放送期間の平均視聴率は23.5%（ビデオリサーチ調べ、関東地区・世帯。以下略）を記録した[12)]。

朝ドラに登場する五代友厚を通じ、北浜界隈が世の注目を浴びた。

参考または引用文献

１）中央区史跡文化事典・改訂版、大阪商法会議所、p.25-26、大阪中央区役所発行（平成22年11月発行）

２）中央区史跡文化事典・改訂版、五代友厚君像、p.58-58、大阪中央区役所発行（平成22年11月発行）

３）中央区史跡文化事典・改訂版、大阪証券取引所ビル、p.24-24、大阪中央区役所発行（平成22年11月発行）

４）大阪市史編纂所編、“大阪経済の復興　４．大阪市の成立 第７章　大阪の近代”、大阪市の歴史、p.257-259、大阪市（1999）

５）三島佑一、“４．大阪一の救世主五代友厚像”、大阪オーラ 日本を予見する日本のハート 上方文庫別巻シリーズ４、p.26－34、和泉書院（2010）

６）藤野　明、“五代友厚・関一記念特殊号　野に下った五代友厚―造幣寮と金銀分析所をめぐって―”、大阪の歴史、18号、24-46、大阪市史編纂所(1985)

７）中岡　哲郎、“五代友厚・関一記念特殊号　日本における工業化思想の形成と五代友厚”、大阪の歴史、18号、3-23、大阪市史編纂所(1985)

８）毛利　敏彦、“五代友厚・関一記念特殊号　私立大阪商業講習所の誕生と五代友厚”、大阪の歴史、18号、48-68、大阪市史編纂所(1985)

９）井上裕務編集、洋泉社 MOOK 五代友厚と渋沢栄一 日本を飛躍させたふたりの男の生涯、洋泉社（2016）
10）“大阪取引所 増える見学者　朝ドラ効果で存在感”、 産経新聞（大阪版、朝刊）３面、2015 年 11 月 24 日
11）“「五代さま」に浸って 朝ドラで注目”、産経新聞（大阪版　朝刊）、７面、2016 年３月 17 日
12）あさが来た、Wikipedia
U R L : https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%82%E3%81%95%E3%81%8C%E6%9D%A5%E3%81%9F

20. 大阪俵物会所跡

大阪俵物会所跡[1)]
（中央区北浜二丁目２番 15 号
北浜一丁目交差点南西側）

俵物とは江戸時代、銅の代わりに長崎の海外貿易の決済に清人の喜ぶ煎海鼠（金海鼠とも書く）、干鮑（ほしあわび）、鱶鰭（ふかのひれ）などを俵詰にしていたものによる呼称で、「ひょうもつ」とも読む[2)]。

1698（元禄 11）年、幕府は銅に代わり、干鮑（ほしあわび）などを輸出商品とした。1764（明和元）年には鱶鰭（ふかのひれ）も加わり、幕府の専売となった[3)]。

この背景として当時、海外貿易の決済で金銀銅の流出の激しいことから、一部を俵物で置き換えることで使用された[2、3)]。俵物は中国の高級食材として需要が高く、輸出されていたことによる[2)]。

一方、俵物会所とは長崎貿易における対清輸出品である俵物を各地から集荷して、長崎に送る機関のことをいう[2～4)]。

幕府は俵物を特定の商人にしか売買できにように独占集荷体制を整え、1744（延享元）年に俵物会所を設置した[1)]。これが俵物の流通拠点である。

1745（延享２）年に長崎俵物会所が、1747（延享４）年に大坂、下関に設置された。大坂俵物会所については当初、備後町にあったが、1777（安永６）年、現在の石碑の建つあたりに移った[3)]。

料亭なだ万はかつてここにあったが、これは俵物会所関係者からおこったもので、

明治維新後、長崎料理を基調とした大阪料理をはじめたものである[3～5]。

江戸時代には俵物会所との関係からか、この界隈には京俵物問屋・北国問屋が多かったようである[4]。

その後 1785（天明５）年に幕府が設置した長崎会所の俵物役所が独占的に集荷するようになったため、あまり機能しなかったが、会所そのものは明治まで続いた[1、3]。

参考または引用文献

１）中央区史跡文化事典・改訂版、大阪俵物会所跡、p.28-28、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

２）宮本又二、“七 俵物会所　第二章 北浜の巻”、船場 風土記大阪 第一集、p.49-52、ミネルヴァ書房（1960）

３）大阪市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護担当　34. 大阪俵物会所（たわらものかいしょ）跡

ＵＲＬ：http://www.city.osaka.lg.jp/kensetsu/page/0000009618.html

４）大阪町名研究会編、“北浜一～五丁目 東区 第二部 町名のうつりかわり”、大阪の町名—大坂三郷から東西南北四区へ—、p.117～122、清文堂（1977）

５）なだ万の歴史

ＵＲＬ：https://www.nadaman.co.jp/pc/company/history.html

21. 淀屋の屋敷跡

淀屋の屋敷跡[1)]
［中央区北浜四丁目］

淀屋の碑[1)]
［中央区北浜四丁目］

大坂のメインストリート御堂筋に架かる淀屋橋は、江戸時代の豪商「淀屋」がつくったといわれることからその名がついた[1)]。淀屋橋ははじめは橋名がなく、単に「淀屋が架けた橋」と唱えられていたが、のち「淀屋の橋」、やがては淀屋橋と略称するにいたった[2、3)]。

淀屋橋の南西、土佐堀川沿いの緑地に、「淀屋の屋敷跡」の碑が建っている。

淀屋の宅地は心斎橋筋の辺りより西肥後橋までのなかかと推定される[2)]。しかし、後代になって、堂島の初相場をたてたのは淀屋橋南詰の西の地であるからはっきりしない[2)]。古書には米仲仕が肥後橋辺りに集まるとあることから、東であろう。また淀屋小路の地名が残っているが、これは淀屋の裏口というが、淀屋の邸内にあった小路かもしれないという[2)]。

今ではその屋敷は、北は土佐堀通りに面し、南は住友生命ビル南側の通り、東は日土地淀屋ビルの東側の筋、西は御霊筋付近にまでおよび、約１万坪があったといわれている[1)]。

淀屋の歴史については、豊臣時代に遡る。初代の淀屋常安（じょうあん）は北浜で材木商を開業した。大坂の陣では徳川方に与し、大坂三郷の惣年寄にも任ぜられ、淀川の改修および中之島の開拓で業績を伸ばした。２代目个庵（こあん）のとき、「米市場・魚市場の開設」、「国

内外の交易」、「大名貸しに代表される金融業」などの幅広い事業を起こし、莫大な財を築いた[6、7]。開設した市場は後に「堂島米市場」、「雑魚場市場」および「天満青物市場」へと発展し、大坂は天下の台所として繁栄していく[6，8]。淀屋は経営の多角化をはかり、２代で巨万の富を築き、その広大な屋敷においては、内装も当時珍重したガラスを多用し豪奢をきわめた[1]。

淀屋の屋敷跡と碑[1]
［中央区北浜四丁目］

1705（宝永２）年、５代目辰五郎のとき、栄華をつくした淀屋の贅沢ぶりが、町人の分を超えるという理由で、幕府に全財産を没収され、大坂から追放されてしまい、淀屋は没落した[4、5、8～10]。

しかし、本当の理由については、膨大に膨らんだ大名の借金を帳消しにするためだったといわれている[1]。その後、辰五郎は各地を流浪し、京都の八幡で生涯を閉じた。

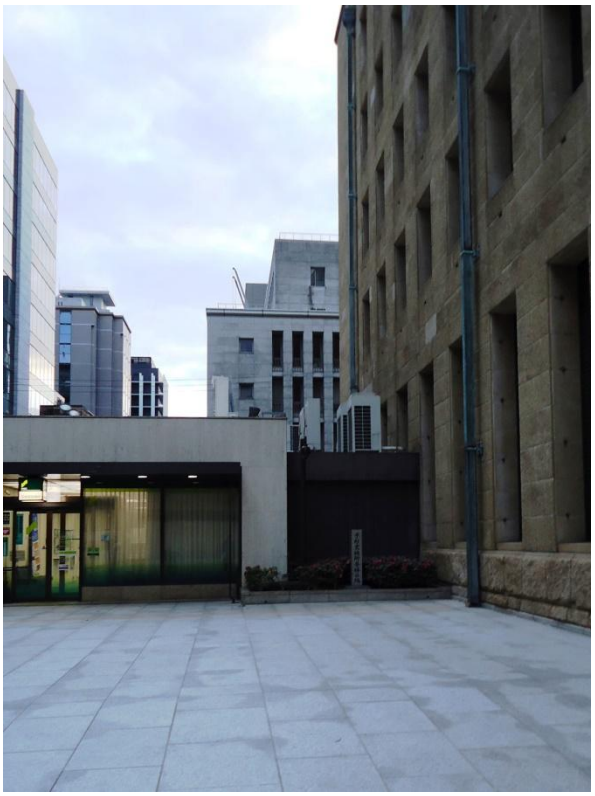
淀屋が商都大坂の基盤をつくったこと、商才で成功したことは現在でもたたえられ、石碑近くに建てられた青銅製の淀屋の碑もそれを物語っている。

参考または引用文献

１）中央区史跡文化事典・改訂版、淀屋の屋敷跡、p.110-111、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

２）宮本又二、“一二 淀屋の跡と北浜の米市　第二章 北浜の巻”、船場 風土記大阪 第一集、p.62-65、ミネルヴァ書房（1960）
３）宮本又二、“一三 淀屋橋　第二章 北浜の巻”、船場 風土記阪 第一集、p.65-67、ミネルヴァ書房（1960）
４）大阪市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護担当、23. 淀屋(よどや)の屋敷跡
ＵＲＬ：http://www.city.osaka.lg.jp/kensetsu/page/0000009593.html
５）淀屋　Wikipedia
ＵＲＬ：https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B7%80%E5%B1%8B
６）高槻泰郎、大坂堂島米市場―江戸幕府 vs 市場経済―、講談社現代新書（2018）
７）新修大阪市史編纂委員会編、“３ 米市場の発展　第四節 三大市場　第三章 水の都城下の建設”、新修大阪市史 第３巻、p.456-460、大阪市（1989）
８）新修大阪市史編纂委員会編、“第三節 享保期の諸政策と堂島会所　第四章 天下の台所”、新修大阪市史 第３巻、p.692-718、大阪市（1989）
９）新修大阪市史編纂委員会編、“１ 初期特権商人の没落　第七節 新興町人　第三章 水の都城下の建設”、新修大阪市史 第３巻、p.512-522、大阪市（1989）
10）渡邊忠司、“四、大坂商人・町人像の成立　Ⅴ 市政・町政と町民の「自治」”、町人の都 大坂物語―商都の風俗と歴史―、144-156、中公新書（1993）

22. 手形交換所発祥の地



手形交換所発祥の地[1)]
（中央区中央区北浜四丁目６番
三井住友銀行東玄関前）

わが国最初の手形交換所（のちの大阪手形交換所）として、1879（明治 12）年 12 月 1 日に当地に開設された[1)]。

東京での開設はこれより８年後のことであった[1、2)]。

以来 100 年、手形取引の健全な育成と大阪経済の繁栄に貢献した[1)]。

当該史跡より、当時の大阪における手形取引の盛況と、大阪金融界の先進性がうかがえる[2)]。

参考または引用文献

１）中央区史跡文化事典・改訂版、大阪俵物会所跡、p.28-28、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

２）大阪市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護担当　22. 手形交換所（てがたこうかんしょ）発祥の地

23. 松尾芭蕉終焉の地

松尾芭蕉終焉の地[1)]
［中央区久太郎町三丁目・御堂筋緑地内］

芭蕉の句碑[1)]
［中央区久太郎町四丁目１番 11 号 ･真宗大谷派難波別院］

松尾芭蕉（1644？－1694）は伊賀国（現三重県）に生まれ、井原西鶴、近松門左衛門と並んで元禄時代を代表する門人のひとりである[1，2)]。芭蕉が俳諧の修行を積み、後に『奥の細道』をあらわし、数々の名句を残したはよく知られている[2)]。

大阪の芭蕉の門下として一番古い人は槐本之道（後に諷竹と改める）である。彼は大阪道修町の薬種屋で、1690（元禄３）年６月、西遊中の芭蕉に入門し、大阪で門戸を開いた[3)]。芭蕉－薬－道修町の縁には興味深いものがある。

1694（元禄７）年９月 10 日の夕刻、芭蕉は長途の旅より大阪に入ると在阪の門人は喜んで、これを迎えた[4)]。この頃から芭蕉は朝夕悪寒に悩まされ、同月 29 日夜より泄痢を起して伏した。10 月５日に御堂筋の花屋仁左衛門の貸座敷に移り、門人たちの看病を受けた[2、4)]。８日、「病中吟」と称して、

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

この句が芭蕉の人生最後の俳諧、つまりは辞世の句となる。10 月 10 日には遺書を下記、ついには翌月 12 日の申の刻（午後４時）に南御堂前の花屋の屋敷の座敷で息を引取った[1、2、4)]。

この芭蕉の終焉については、弟子の其角の『芭蕉翁終焉記』や支考の『前後日記』、路通の『行状記』などのほかに肥後（熊本県）八代の文暁という僧が 1811（文化８）年に花屋の子孫花屋庵奇淵と組んで著した『花屋日記』という本がある。その『花屋日記』はいかにも真実に迫ったような書き振りではあるが、全くの偽書であるといわれている[4)]。

しかし、そのなかに蕉門のひとりで、医者であった木節のすすめで、芭蕉の唯一の身寄りであった次郎兵衛が、朝鮮人参と包香を道修町の伏見屋という薬種屋から取寄せて芭蕉に飲ませるところがある[4)]。ここにも芭蕉と道修町との縁をみつけることができる。

現在の「芭蕉終焉の地」の碑は難波別院（南御堂）の前、御堂筋の緑地帯内にひっそりと建っている。もともとはそのあたりまで街並みがあったが、御堂筋拡張工事に伴い、緑地帯のなかに入ってしまった[5)]。碑は 1934（昭和９）年に大阪府が建立したものである。

「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」は、芭蕉の辞世句であるといわれる。しかし、生前芭蕉が常に死を意識していたことから、正確なところ、芭蕉には辞世句は存在しないともいわれる[1)]。一句一句をすべて辞世句のつもりで詠んでいたのである[1)]。

なお、「松尾芭蕉終焉の地」の碑の向かいにある南御堂内には、「旅に病んで･････」の句碑がある[1)]。

参考または引用文献

１）中央区史跡文化事典・改訂版、芭蕉終焉の地、p.93-94、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

２）松尾芭蕉、Wikipedia、URL：https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%BE%E5%B0%BE%E8%8A%AD%E8%95%89

３）新修大阪市史編纂委員会編、“芭蕉門下の人々　1　連歌と俳諧 第二節 文学　第五章 近世前期の文化”、新修大阪市史 第３巻、p.907-908、大阪市（1989）

４）宮本又二、“一一 芭蕉終焉の地　第八章 唐物町・北久太郎松・南久太郎町の巻”、船場 風土記大阪 第一集、p.338-340、ミネルヴァ書房（1960）

５）“終焉の地は花屋の離れ 「夢は枯野を」名句生む 芭蕉は御堂筋で亡くなったん？ 御堂筋トリビア 完成 80 年 7”、産経新聞、８面、2017 年５月 19 日

24. 住友銅吹所跡

住友銅吹所跡[1)]
[中央区島之内一丁目６番７号]

大坂の銅吹屋中、最も有力なものが住友家である[2)]。

寛永年間（1640 ころ）住友家第２代、友以（とももち）によって開かれた銅精練所跡である[3、4)]。当時大坂は銅精練業の中心地で、両横堀・長堀など川沿いの舟運の便利な場所に多くの銅吹所があった。輸出用の銅はすべて大坂でつくられ長崎へ送られた[2)]。

市中の銅商はこの銅座に集まって、銅の価格を定め、門外に時の相場を記した札を掲示した[2)]。また、長崎より役人が来たときはここに泊まった。和蘭商館長が江戸を参観する時にも大阪通過を通過する際にはここを宿所とした[2)]。シーボルトもここに泊まって、東西町奉行所や銅吹所を訪ねている[6)]。

近年の発掘調査により、金銀を収納する地下金庫・約 80 基に及ぶ炉跡や、住居跡からは当時の生活を偲ばせる、中国陶器片が多数見つかっている[3)]。

この銅吹所は 1873（明治６）年頃まで続き、その後住友家の居宅となった[3)]。

当時木造の洋館は珍しがられたが、戦災で焼失した[3)]。

参考または引用文献

１）中央区史跡文化事典・改訂版、住友銅吹所跡、p.67-67、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

２）宮本又二、“八 銅座　第二章 北浜の巻”、船場 風土記大阪 第一集、p.52-55、ミネルヴァ書房（1960）
３）宮本又二、“７　銅貿易と友芳　第七章 住友友以と友芳”、大阪商人、p.201-205、講談社学術文庫（2010）
４）宮本又二、“９　銅座と住友　第七章 住友友以と友芳”、大阪商人、p.205-211、講談社学術文庫（2010）
５）大阪市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護担当　40. 住友銅吹所（すみともどうふきしょ）跡
ＵＲＬ：http://www.city.osaka.lg.jp/kensetsu/page/0000009635.html
６）宮本又二、“四、 銅座と住友銅吹所とシーボルト　第十四章 銅座と住友とシーボルト”、大阪経済文化史談義、p.251-255、文献出版（1980）

25. 安井道頓・道卜紀功碑

安井道頓・道卜紀功碑[2)]
［中央区島之内二丁目 16 番］

道頓堀は大阪を代表する顔である[1)]。

道頓は豊臣秀吉から大坂城築城工事の恩賞として当時荒地であった現在の道頓掘一帯をたまわった[2～4)]。

道頓堀の開削は道頓・道卜らによって開始され、1612（慶長 12）年、つまりは豊臣秀頼の時代に始まり、江戸時代の初代大阪城主松平忠明治世の 1615（元和元）年に完成した[2、4)]。この間、開削を主導した道頓は大坂の陣において西軍に与し、大坂城内で戦死した[2、4)]。このことは、司馬遼太郎の作品においても取上げられている[5、6)]。

道頓堀の命名については、この堀の開削に私財を投じた道頓の功績をたたえた松平忠明によるものである[2，4)]。

この紀功碑は 1914（大正３）年に道頓・道朴に従五位が贈られた。翌年道頓堀開削 300 年を記念し、地元の有志によって、旧安井屋敷跡に建立された[2)]。

その後、2015（平成 27）年の道頓堀開削 400 年を目前にし、紀功碑のひび割れなど風化が進み、崩落などの危険性が懸念され、大阪市が取壊しの方針を決めたものの、地元の商店会や保存に向けた取組みにあたり、補修がなされた経緯がある[7、8)]。

またこの年、大阪では紀功碑の補修ほか、大坂の陣 400 年や道頓堀開削 400 年を記念した行事、イベントが開催された[9)]。

なお、すぐれた町人学者として知られる佐古慶三氏は、早くから道頓は安井氏ではなく成安氏であるとの主張をして、安井道頓説が否定されている[3、10)]。

昭和 40 年代に入り、道朴後裔によって、大阪地方裁判所に国と大阪府と大阪市を相手どり、道頓堀川の河川敷地は自分の所有地であることから、その所有権を確認し

てほしいという請求がなされた道頓堀裁判[10~12]は裁判史上よく知られ、道頓堀事件とも呼ばれる。

参考または引用文献

１）三島　佑一、“道頓堀が文学を取り戻すとき 近松を育てた芝居町はいま”、産経新聞（大阪版 夕刊）、４面、2002 年 10 月 19 日

２）中央区史跡文化事典・改訂版、安井道頓・道卜紀功碑、p.108-109、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

３）脇田　修、近世大坂の町と人、吉川弘文館（2015）

４）中村博司、“道頓堀開削と松平忠明　２ 松平忠明の事績　第４章 松平忠明の時代”、大坂城全史－歴史と構造の謎を解く、214-215、ちくま新書（2018）

５）渡部　裕明、“日曜に書く、「けろりの道頓」が造った町”、産経新聞（大阪版 朝刊）、７面、2015 年６月７日

６）司馬遼太郎、けろりの道頓（『最後の伊賀者』所収）、講談社文庫（2007）

７）“ひび割れ放置 修復めどたたず 水都・大阪の祖 安井道頓顕彰碑”、産経新聞（大阪版 朝刊）、19 面、2011 年 10 月 24 日

８）“「次の 100 年に向け残せた」安井道頓・道卜紀の石碑修復”、産経新聞（大阪版 朝刊）、22 面、2014 年７月 13 日

９）“大坂の陣 400 年記念　吉本新喜劇３部作　完結編は「成安道頓」”、産経新聞（大阪版 夕刊）、４面、2015 年９月 19 日

10）牧　英正、道頓堀裁判、岩波新書（1981）

11）“道頓堀川な安井家のものか 日本橋　とん堀幻視行２”、産経新聞（大阪版 朝刊）、26 面、2018 年１月 25 日

12）“道頓堀繁栄 功績にお墨付き 三津寺墓地　とん堀幻視行３”、産経新聞（大阪版 朝刊）、26 面、2018 年２月６日

26. ボードインゆかりの地

ボードインゆかりの地[1)]
（中央区中寺町一丁目１番 32 号
法性寺境内）

アントニウス・フランシスクス・ボードウィン（Anthonius Franciscus Bauduin、1820－1885）は、オランダ出身の軍医医であり、1862（文久２）年、先に日本の出島に滞在していた弟の働きかけにより、江戸幕府の招きを受けて来日した[2)]。

ポンペの後任として長崎養生所の教頭となる[3)]。

養生所においては基礎科学教育の充実に努めた[3)]。幕府に医学・理学学校の建設を呼びかけ、その準備のために 1866 年（慶応２）年に教頭を離任し、緒方惟準（いじゅん）ら留学生を伴って帰国したが、大政奉還で白紙に戻ったため、1867（慶応３）年に再来日し、新政府に同内容の呼びかけを行った[2)]。

1868（明治元）年の布告によると、大阪に本格的な医学専門教育学校と病院建設を計画していた。学校については舎密局（せいみきょく）[4)] が発足したが、病院は財政難に陥り、1869（明治２）年にようやく大福寺で浪華仮病院（天王寺区上本町四丁目１番）として開業した[2)]。

院長は緒方惟準（緒方洪庵二男）、主席教授はボードウィンで、医学教育にもあたった[2)]。

浪華仮病院の開設に伴い主任教授として、抜擢され、診療と講義を２年間担当した。その際に住まいとしていたのが、法性寺[5)] であった。

日本の食事に閉口したボードインは、この寺の境内で食用として豚を飼い始めた[1)]。驚いた世話役の薩摩屋半兵衛（さつまやはんべえ）が制すると、ボードインは目をむいてこういった。

「人間は他の生命を食べて生きている。その霊を弔うのに寺は最適の場だ」[1)]

彼は十字を切りながら、おいしそうにトンカツを食べたという[1)]。

1870（明治３）年、ボードインは大阪仮学校、大阪陸軍病院に務め、大学東校で教鞭をとった後に任期満了となり、帰国の途についた[3)]。

ここにあったのはわずか３か月たらずであったが、これが適塾とともに大阪大学医学部へと発展する[2)]。

なお、ボードインは、とりわけ眼科領域で優れており、日本に初めて検眼鏡を導入した[2)]。

また、ボードインが日本に持ってきた健胃剤の処方が日本人に伝播され、独自の改良を経たものとして太田胃散と守田宝丹がある。いずれもその後品質改良や薬価改定などによって形状・成分の変更などが行なわれたが、現在にいたるまで市販されている[2)]。

ちなみに大阪における幕末の機能は大坂（大阪）城にあり、英国のほか、フランス、米国、オランダの代表団もここ中寺町周辺に宿所＝臨時公使館を置いた[6)]。当時大坂に入った英国のハリー・パークス公使ら同国代表団のために幕府は中寺町内の正法寺など４つの寺を提供した[6)]。パークスの有能な部下で通訳のアーネスト・サトウが宿泊したのは、同じ町内の本覚寺であった[6)]。

大坂が外交の舞台として、初めて見る異国人に街はざわめいていたという[6)]。

参考または引用文献

１）中央区史跡文化事典・改訂版、ボードインゆかりの地、p.100-101、大阪中央区役所発行（平成 22 年 11 月発行）

２）アントニウス・ボードウィン　Wikipedia、URL：https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%B3%E3%83%88%E3%83%8B%E3%82%A6%E3%82%B9%E3%83%BB%E3%83%9C%E3%83%BC%E3%83%89%E3%82%A6%E3%82%A3%E3%83%B3

３）石田純郎、“お雇いオランダ人医師総論 ボードィン人脈”、29（３）、日本医史学雑誌、328-337（1982）

４）宮崎啓一、“41. 日本化学の黎明を告げた大阪舎密局”、p. 192-193、日本薬史

学会編、薬学史辞典､薬事日報社(2016 年３月 30 日）
５）宮本又二、“９ 川端家とボードウィン　第五章 薩摩屋仁兵衛と川端半兵衛”、大阪商人、167-168、講談社学術文庫（2010）
６）“維新 50 年 大阪の痕跡を歩く≪27≫ 外交官の見た OSAKA－中寺町－”、産経新聞（大阪版 朝刊）、21 面、2019 年１月 12 日